

ニンニク、トウガラシのたっぷり入ったマンジュウがほかほか湯気をたてていた。兵士たちはわれを忘れてむさぼり食った。

たどりついた部落で仮眠し、翌朝は暗いうちから出発する。悪臭が鼻をつく。あたりを見回すと、道ばたに友軍の負傷兵がうずくまっている。足の傷はすでに化のうし、ウジがわいていた。この匂いだつた。また雨が降りだした。愛用のドイツ製カメラ、セミコンタで上陸以来部隊の行動を写してきたフィルムは雨と泥で、ホゴ同様になっていた。伊藤上等兵は内地にいるところから写真好きで全関西写真連盟に加入していた。ひとつ戦場の写真でもとってくるか、と遊びのつもりで、出征してきたのだつた。それがこんな苦闘になるうとは……。だだっ広い中国大陸、日本軍の猛攻といつても大きな白紙に引いた細い線にしかすぎない。(この一本のぬかるみの堤防をおれたちはどこへ行くのだろうか。この苦労がどんな意味をもっているのだろうか)はれ上がった足を引きずりながら考えた。そしてぬかるみの中へカメラをたたきつけた。



伊藤晋一さん

こねてすべって昨日も今日も
ぬれたごろ寝のかり枕
ねてもねられぬ土砂降り続き
タマが鉄砲が気にかかる
(「討匪の歌」 斉藤劉の作詞)
戦友が低く口ずさんでいる。

五里屯に着いた夜、部下四人を連れて警戒にでた。民家の屋根にひそんだ敵から突然手投げ弾を投げつけられ、部下一人が負傷、伊藤さんも顔、腕に破片を浴びた。右手の小指にはいまでもその破片が残っている。

伊藤さんは二十年六月、大阪で結成された海軍の高射砲部隊に編入され、ダバオを経てパラオに渡った。ここで終戦、抑留後復員した。

(三) 寧晋で休養、軍容整備

——戦線は泥沼へと発展——

転進命令

十月二十日、連隊はその兵力を寧晋（ねいしん）に集結した。しばらくは人馬の休養と軍容の整備である。被服、弾薬などを支給されるとともに、内地から補充員も到着した。またこれまで戦死した将兵の遺骨が戦友の胸に抱かれて内地へ帰って行った。戦火はすでに黄河の線まで下っていた。寧晋の町は、避難していた住民たちもぼつぼつ帰ってきて露天市が開かれている。町も落ちつきを取りもどしたようす。兵士たちは野戦ぶろにつかって鼻歌をうたったり、慰問袋にはしゃいだりした。はや内地帰還かも知れん、と思う兵もあった。連日最前戦で激闘してきた将兵としては、そう願うのが人情だった。だが戦線は拡大の一途をたどっており、泥沼の戦争へと発展して行った。三十三連隊を上海会戦（末期）に投入する作戦計画が出来上っているとは、将兵は誰ひとり知る由もなかった。

三十日早朝、連隊は出発した。第二機関銃中隊、上等兵だった西田優さん（死亡、存命中は久居市森に住む）の行軍日記から引用しよう。（以下は原文のまま）

十月二十九日 晴レ 七時整列出発、正定ニ向カウ、行程約七里。リップナ新道上ラ久方ブリノ背ノウ行軍ニテ疲労ハナハダシ。部落ニ宿営ス。

同三十日、六時出発、行軍約七里。補充隊四十余名キタル。一部落ニ宿営、岸江幸男ニ面会ス、サトウ湯、スルメノチソウニナル。

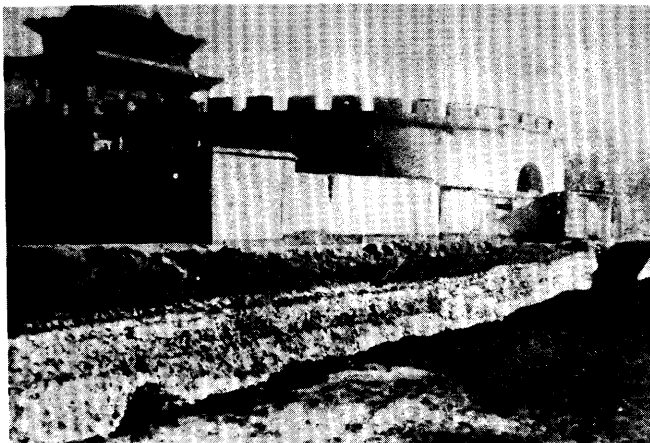
同三十一日 晴レ、七時出発、約五里行軍、凌透村着宿営ス。

十一月一日 晴レ 滞在、土民ノ歓迎ウレシ、感謝ス。

同二日 晴レ、休養、カラスノ群ヲミル、内地ニテハ見ラレザル情景ナリ。

同三日 晴レ、五時起床、本日ハ明治節、東天に遙拝シ、行軍約二里、正定ニ向カウ、正午着。飯ゴウ炊事ヲシテ午後五時四十分ワレラノ大隊ノ列車ハ某地ニ走ル。某地トハ？貨物車ニ五十人以上乗リ込ミ、小便ニ不便ヲ感ズ。

同四日 晴レ 午後六時過ギ天津着、乗舟ス（卸下）演習



寧晋県城

(敵前上陸ノ)午後九時帰宅、慰問袋オヨビ故国ヨリノオ便リチヨウダイス、ウレシ。

同九日 晴レ 六時起床、七時集合、大連港ニ至ル。リンゴ、ビール等買イコミ、フ頭ニテタバコケース、パイプ買ウ。牛馬順一君ニ面会、午後乘リ込ミ、六時港ヲ出ル、ドコニ行クヤラノ

同十日 晴レ ドコニ行クヤラ上海? 杭州? 青島? 甲板上ニテ見物、風呂ニ入ル、植田、黒田、牛場、中川、柏木と酒ヲ飲ム。

同十一日 晴レ 午後三時中隊長の敵前上陸、衛生ニツイテ学習、上陸地ハ不明ナルモ上海ナラン、ワガ分隊一日対空監視ナリ。

同十二日 晴レ 舟内ニテ便リヲ書ク。出発準備。

同十三日 晴レ 小雨、友軍ノ海軍砲弾盛シニ撃ツ。モノスゴシ。背ノウ、コン包下舟(午後六時)敵前上陸(工兵ノ発動艇ニテ)ヒザヲ没スル所ヨリ渡河。午後八時宿営ス(連隊は白茆口に敵前上陸したのである。)

同十四日 晴レ 七時ヨリ出発、追撃、卸下ノタメ疲労ハナハダシ。支那人ヲ徴発シテ荷物ヲ持タス。午後一時ゴロヨリ敵ニ出アウ。ワガ連隊モ多数負傷アルモヨウナリ、途中敗残兵二人殺ス。所々火災起コル。土地内地ニ似タリ。股ズレシテ困ル、生水ヲ飲ム。財布マデ汗ニヌレテ日干シニスル。激戦、追撃、焼き払イナド十二時マデヤリ、一時三十分銃前哨ニテ休ム。

同十五日 晴レ、四時起床。追撃。敗残兵多数殺ス。東へ約一里半、某市街へ行き、昼食ノアト引き返シ、常熟ニ向カッテ前進ス。十一師団ト同ジニナル。疲労ハナハダシク落後隊形。午後六時本隊トトモニ

ナリ、一部落二宿營ス、途中、敵兵ノ爆撃死体多シ。

(三) 川に飛び込み進軍

——敵弾がほおをかすめる——

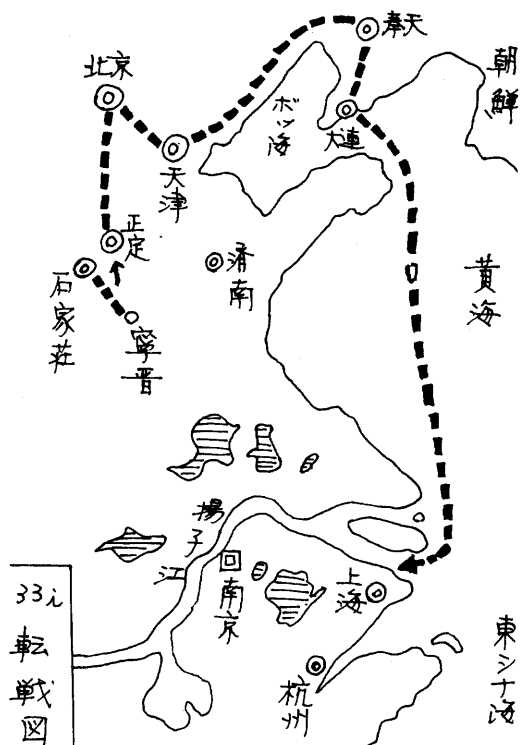
白茆口へ敵前上陸

第五中隊第一小隊第一分隊の上等兵だった古川政男さん（七）Ⅱ伊勢市辻久留町一六三に在住Ⅱの最も印象に残っているのが白茆口（はくぼうこう）の敵前上陸である。

呉淞（ウースン）沖にいったん停泊した輸送船は十一月十三日未明、イカリをあげ揚子江をさかのぼりはじめた。前後には、わが海軍の護衛船団が夜目にも白く波を切っている。もちろん、だだっ広い揚子江の両岸は見えず、将兵たちはまだ海上を航行しているものと思っていた。

揚子江を約六十キロのぼった船団は午前八時三十分ごろ、上陸地点の白茆口に到着した。すでに上海からは激しい銃声が聞こえている。先着（約四キロ上流）の重藤旅団（台湾）が上陸を開始したらしい。やがてわが輸送船団を護送していた五、六隻の駆逐艦が対岸めがけて猛烈な艦砲射撃を開始した。大東亜戦争末期と違い、当時制海空権を完全に握っていた（その上支那事変では海軍の活躍の機会も少なかった）わが海軍にとっては、またとない実戦訓練みたいなものだ。砲声も威勢がよい。楊柳やヨシが茂り、小部落が点在する上陸地点の江岸は、艦砲射撃の前にもうもうと黒煙をあげ、土煙をあげ、すでに敵陣は混乱し始めていた。

古川上等兵はもちろん、ほとんどの将兵が初めて体験する敵前上陸であった。一部の兵たちは大連で訓練したが、古川一等兵は勤務のつごうで船内で学科を受けたただけだ。だが華北上陸以来二カ月の野戦経験を経ているだけに度胸はすわり、敵弾雨にはもうなれていた。上陸開始命令を待ちかねた。午後三時過ぎになり、やっと上陸命令がでた。兵士たちは背のうと監視要員を船内に残し、背負い袋(下着と携帯食糧)と銃だけの軽装となり、ナワばしごを伝って次々鉄舟(大発艇)に乗り移る。船団は方向転換したらしく、兵士たちは右側から下船した。



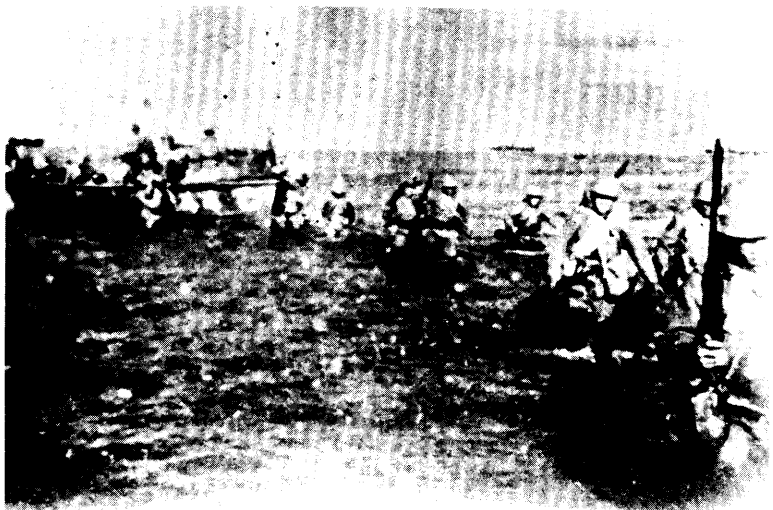
第33連隊転戦図

当時のナワばしごは、麻ナワ三本に足かけを組んだもので、銃を肩に真中のナワを握っておりと教えられていた。だが銃の重みで重心が取りにくく、かといって両端のナワを握るとくねくねしてかえって始末が悪い。やっと乗り移ると鉄舟(一隻に約一分隊)は対岸をめざして白波を切った。同時に駆逐艦が上陸援護の艦砲射撃を開始したが、敵もチェコ式銃を乱射してきた。十五、六分も走ったろうか。江岸が

見えだすと、敵弾は激しさを加える。これ以上は鉄舟はあぶなくて進めない。兵士たちはばらばらと川にとび込む。水深は胸まで、川底は砂地だ。波もかなりある。（なにしろ二十^キにわたる砂浜のこと、上陸地点によっては比較的弾も少なく、鉄舟が河床をかするまで、水深ひざ位で上陸した兵士もある）兵士たちは銃や軍刀を両手で頭上に押し上げ急ぐ。

敵弾が間断なくほおや肩をかすめる。岸辺には中国特産の竹を割り、先を鋭くとがらした逆茂木（さかもぎ）が無数に植えつけてある。雨天にはカサをさして戦闘する中国軍のこと、日本兵もクツをぬいではだして上陸してくるものと考えていたのか、将兵が岸にかけ上がる頃には敵の銃火はほとんど鳴りをひそめ、すでに敵の大部分は支塘鎮（しとうちん）方面に退却中だった。

「上陸成功」の信号が沖の船団におくられた。意気込んだ兵士たちも、あつけない敵の退却に気ぬけた。それに時刻はもう日没。水につかったからだが急に冷たく

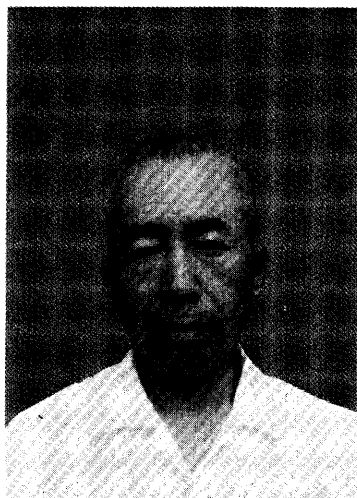


白茆口に敵前上陸

なった。露営の予定だったので兵士たちは火をたき、服をかわかした。防寒外とうは船内に残してあり、

大陸の晩秋の寒気はハダにこたえた。古川上等兵らは、急に夜行軍の命を受け、直ちに出發、上海—南京間の新しい軍用道路を行軍、常熟の戦闘に移ったのだった。

古川さんは大正十五年兵、昭和二年入隊（久居）十二年八月、三十二歳当時（後備役）召集を受け、十三年五月唯県（すいけん）で負傷、大別山で復帰、十四年連隊とともにがい旋した。大東亜戦争は二十年召集、前田隊で朝鮮にわたり、約半年間鉄道警備にあたった。



古川政男さん

(三) 138 柱の英霊、故郷に

——沿道の遺族らすすりなく——

遺骨宰領

“名譽の戦死”とか“護国の花”ということばは、当時誰もが信じこまされていたことである。だが妻や子は果たして“よくぞ死んでくださった”と喜んで白木の箱を迎えただろうか。いや“たとえ足を失なつてでも生きのびてくれなかったか”と悲しみ、戦争をのろつたはずである。第一回の遺骨宰領で内地に帰ったとき、出迎える家族のすすりなきを聞き、戦死の名譽に疑いを抱くようになったという。

第十一中隊第三小隊長（准尉）だった三輪国郎さん（久居市榊原）は昭和五十四年死去したが、生前当時のことを次のように回顧していた。

寧晋に駐とん中の十月末の事。三輪准尉は岡田博二副官から、第二軍の遺骨宰領を命じられた。その頃に南京攻略戦が予想されていたので「大作戦を前に大事な部下を放りっぱなしにして内地へ帰れません」と断ったが「戦友の遺骨を送還することも重要任務」と説きふせられ、仕方なく出発することになった。

天津に引きかえし、日本租界伏見街の観音寺に一括安置されている遺骨を整理し、白木の箱に納めて内地に送り届けるという任務である。

師団各部隊から四、五人の兵が選ばれ、三輪准尉が指揮を命じられた。一行は本隊とは逆の方向へ、天津めざし出発した。もちろん徒歩、武器は小銃だけである。一行がたどる道は、つい先頃自分たちが戦い、占領した地ではあるが、守備隊など友軍は全然おらず敗残兵や土民の襲撃にあう危険は十分にあった。これ以上心細いことはない。三輪准尉はつとめて部落を通ることを避け、見通しのきくところを選んで行軍する。うっかり部落内を通れば、包囲襲撃される。川にでくわすと、小舟を探して渡った。こうして約十日間、やっと天津へ着いた。

観音寺の住職は、事変突発以来従軍僧として活躍している花井嶺松師（当時伊賀町柘植、万寿寺住職）だった。遺骨整理は大仕事である。戦死した兵は、戦闘後ダビにふし、遺髪などと共にありあわせの袋やあきカンに入れて次々観音寺に送っていた。山と積まれた第二軍の遺骨の中から、連隊の戦死者名簿と照

らし合わせて関係分だけをより分け、さらに整理して箱に納めるのである。名簿には記載されているが、かんじんの遺骨がまだ戦線から届いていないのもあった。

こうして大橋毅郎少佐以下百三十八柱の英霊は、三輪准尉以下十四人の戦友と花井住職に守られ、商船「長安丸」に乗船、十二月二十六日太沽（タークー）を出港した。同船サロンの特設の祭壇に安置された英霊は二十四日神戸港から上陸、大阪と京都（師団司令部）で慰霊祭のあと、国鉄津駅に帰った。

津駅から約百三十台の車に分乗した遺骨は津市内を徐行しながら久居のどん宮に向かったのである。町の灯火は全部消され、提灯が家々の軒に掲げられていた。津駅から阿漕駅への沿道には遺族や市民がぎっしり並んでいる。その中を車はゆっくり進む。このとき三輪准尉はおえつを聞いた。

（おやつ）

なお耳をそばだてると、沿道の人々はみなすすり泣いているではないか。はじめは耳を疑った。三輪准尉の気持は複雑であった。

（名譽の戦死だから、遺族は当然よろこんでくれるはずではなかったか。それなのに、この涙は一体どういうことなのか）

考えた。悩んだ。そして「一日でも生きのびることが、国への奉公ではないか」とひとまず自分の考えをまとめた。

さて、久居で慰霊祭のあと、三輪准尉は上海を経て南京にいる本隊を追った。復帰した日はちょうど南京城内外の掃討がすんだ日だった。原隊に帰った三輪准尉の心情は、出発どきとはまるきり変わっていた。

歩兵操典を熟読し、どうしたら部下を死なさないか、熱心に研究した。「あの日から私は戦争を憎んだ。だが、突撃する時はまっさきに敵陣におどりこんだし、部下もかばった。なぜなら私は兵隊であり、ここが戦場だったからです」と、三輪さんは力をこめて言った。

のち三輪さんは大別山の戦闘最後の日に左足首ねんど赤痢で後送された。終戦は津連隊区司令部の高級副官（大尉）で迎えた。

【遺骨宰領の十四人】（カッコ内は出身地）谷口金市（四日市市八郷中村町）▽鈴木○蔵（伊勢市常磐町）
|| 一字不詳 || ▽清水茂造（上野市魚町）▽水谷甚六（鈴鹿市関町新所）▽本郷一雄（鈴鹿市椿）▽岡田久五郎（四日市市富田一色）▽八木孝治（度会郡度会町）▽谷岡雪男（志摩郡大王町波切）▽太田進（桑名市小泉）▽水谷義次郎（桑名市猪飼）▽福井辰生（名賀郡）▽山本清七（伊勢市朝熊町）▽古田勝郎（多気郡大台町）▽小谷静雄（一志郡嬉野町）

（三） 支塘鎮めざし進撃

——白茆口岸で一夜明かす——

上海会戦

上海・白茆口岸の娯宅（部落の名）付近で一夜を明かしたわが連隊は、翌十四日早朝から支塘鎮（しとうちん）めざして進撃を開始した。防衛研究所戦史室の資料によると、三十三連隊の属する第十六師団（京都）は、上海会戦末期（白茆口上陸十一月十九日常熟付近進出まで）に参加したわけで、同作戦とともに

戦った部隊は第三、第十一、第九、第十三、第一百一、第六の各師団と台湾混成旅団、それに岡崎支隊である。

前項で引用した兵士の日記のとおり、当時將兵たちは、自分たちの部隊がなんの目的（作戰）でどこへ行くのか全く知らなかった。知らされなかった。彼らは目かくしにされた馬車馬のように、新しい戦線へ追いたてられて行ったものである。従つて、どんな作戰で三十三連隊に転進命令がでたかを明らかにする必要がある。以下は戦史室の資料によつた。

× × × × ×

十月下旬、上海派遣軍は行き詰まつた戦況を打開するため蘇州河付近の敵陣地突破を企図し、第三、第九、第一百一師団をもつて同月末および十一月始めから渡河攻撃を開始させた。第十一師団には、軍主力の右側の援護、第十三師団は重藤支隊（台湾混成旅団）と交代し、第十一師団の北翼の援護を命じた。

一方、中央総帥部は上海方面の戦況を検討した結果、十月下旬第十軍（第六、第十八、第一百十四の各師団と岡崎支隊＝第五師団の一部）を杭州湾付近に上陸させ、敵の右側背に迫らせるとともに、有力な一兵団を揚子江上流方面から進め、太湖付近の沼沢地帯を背にする中央直系軍を包囲して、これに一大打撃を加え、敵の抗戦意思をくじくことに決まつた。

第十軍は十一月五日払暁から逐次杭州湾（金山衛付近）に上陸を開始し、上海方面に対する作戰を開始した。

上海派遣軍は、中央統帥部の意図に基づき十一月八日、第一師団および重藤支隊を抽出し、華北から転

用された第十六師団とともに白茆口付近に上陸させ、常熟を経て無錫（むしゃく）に向かい前進して敵の退路を断ずる計画をたてた。

中央統帥部としては当初、十一月十六日福山付近に上陸させる計画だったが、同月十一日になって敵ははや退却するものと判断し、上陸実施を十一月十三日にくり上げた。重藤支隊、つまり台湾歩兵第一、第二連隊台湾混成旅団主力および第十一師団第二十二連隊、第十一混成旅団の一大基幹は十一月十二日呉淞（ウースン）から乗船、二十時出発、十三日六時舟艇に移乗して白茆口付近に上陸を開始した。第十一師団主力の上陸は直接追撃に転じた方が有利だと判断したので、転用は中止となった。こうして第十六師団は十一月九日、数梯（てい）団となって大連を出港、十二日その先頭（第一船団、錫蘭、インドア、セイコラ、台南丸乗船部隊）は、呉淞に到着し、その一部（第三十旅団、つまり三十三連隊が属する。奈良三十八連隊は、このときは含まず）は十三日午後三

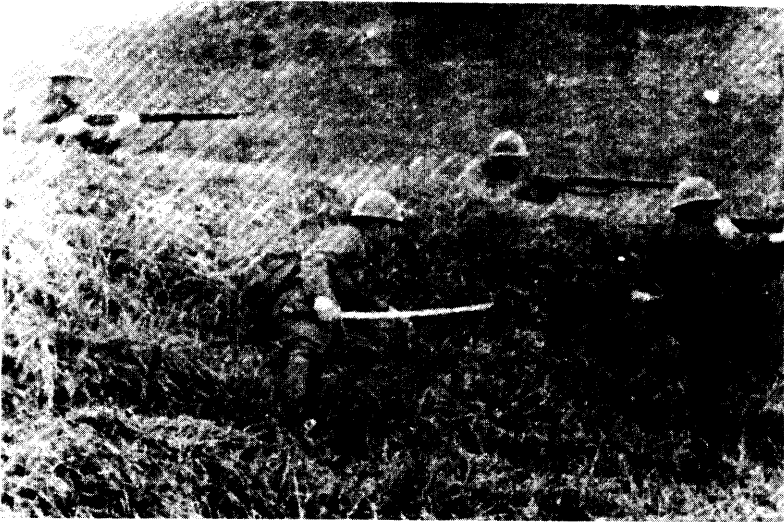


上陸地点白茆口岸付近の要図

時から白茆口付近に上陸した。第十六師団主力は十四日、白茆口上流に上陸し福山攻撃を開始した。

三十三連隊は上陸後、重藤支隊左側支隊（長・京橋大佐、台湾第二連隊と独立機関銃の第七大隊の一中隊、後備山砲第一隊）を超越し、支塘鎮に向かったのである。左側支隊の任務は、支塘鎮を占領し、ついで三里橋付近に前進、常熟付近の敵に対する攻撃を準備すべし、というものであった。

上海派遣軍は十一月十一日夜、滬寧（こねい）鉄道（上海―南京間）北側地区に保持して当面の敵を撃破し、太倉―崑山の線に向け進撃することに決めた。同月十四日午前八時、軍艦「大井」から次の軍命令を発した。①敵の大部隊は蘇州より無錫に向かい退却中にして、常熟付近には、敗残兵力が敗走しつつあり。第六師団は崑山東方の敵陣地を攻撃中にして、第九師団はその右翼に進出しつつあり②第十六師団は上陸に伴い、主力をもって福山口南方地区より楊尖鎮（常熟西方約十六キ）敵家橋鎮、



食うか食われるか敵前200メートル

陳野鎮の線に進出し無錫に向かう南進を準備すべし。支塘鎮占領部隊は第十一師団と連絡したあと、師団主力を追及すべし。

このため第十六師団主力は、まず主力をもつて常熟向け前進し、重藤支隊とともに常熟付近の堅固な敵陣地を突破（十九日）常熟を占領した。

なお福山―常熟―蘇州付近の敵は中央直系の第四十七師半分（福山）第九十六、第九十七（常熟）第九、第一百六十七師（蘇州）であった。郷土の將兵は、これら正規軍精銳と激戦を展開したわけである。以降、南京向け追撃戦へと移っていく。

（云） 敵の退路を遮断へ

――前進中敵襲、応戦し圧迫――

支塘鎮の戦闘

三浦俊雄少佐の第二大隊（二中隊欠、当初は第三大隊とともに）は連隊砲、馬匹等の集結を待たずに、前衛となり十四日午前七時呉宅を出発、猛蔣廟（もうしょうびょう）向け本道上を前進しはじめた。目的は、上海―南京間の軍公路を撤退中の敵の退路をしゃ断するためである。午後一時ごろ、張家橋付近に差しかかると、突然前方から射撃を受けた。尖兵の第六中隊（辻四五郎大尉）は直ちに展開し応戦、部隊の前進は一時遅滞した。同二時ごろ、前衛本隊の先頭にあった第五中隊（肱岡直大尉）と第七中隊も急拠これに参加、敵を圧迫した。

六中隊の左、道路左方の畑に散開した五中隊は敵チェコ式機銃に前進を阻まれたが、中隊のテキ弾筒が威力を発揮し、じりじり詰めよった。同五時三十分、まず三大隊正面の敵が浮足だったので、すかさず追撃に移る。同六時には本道上に兵力を集集、夜間追撃を開始した。

五中隊長だった肱岡直さん（鹿児島県出身）は「戦闘一、二時間で再び縦隊行進に移った。当面の敵兵力は半大隊か一個大隊弱ではなかったか。軍公路退却中の敵主力から退却援護のため側方に出された敵ではなかったろうか」と回想している。



支塘鎮における山田連隊長

敵はすでに戦意を失っており、投降者が百人を越えていた。同十一時には花淫付近に達し、主力は同地で露営、一部で常熟―支塘鎮道をおさえ、敵の退路をしゃ断した。六中隊長第一小隊長だった横山孝三さん（七三）久居市新町Ⅱはこのときのもようをこう語っている。

「付近はクリークが多くて苦勞した。戦いは、第一線中隊は、手持ちの火力、てき弾筒を敵銃座に集中し、夕暮れに

なつてやつと敵前二、三百に接近、これで敵は退却を始めた。陣地後方の本道にかかつている橋で敵は抵抗を見せ、少数の負傷者が出た。さて追撃に移ったが、六中隊が前兵となつたように記憶している。前進に移つてもなく、前のほうで捕りよだという声を聞いたのでみると、敵兵がぞろぞろ投降してくる。青い綿入れの軍服を着たかっこうは一人前だが、顔を見ると子供のように若い兵隊だつた。十七、八歳ぐらいだろうか。十分訓練もされないまま、祖国防衛のため、戦線にかりだされたのでしようかね。その後、将校斥候となり、翌十五日朝から行動を起こしたが、上海—南京道の三差路に出てみると、すでに敵は退却したあとでがっかりしたものです。道路上には友軍の爆弾による敵兵の死体ごろがり、武器弾薬、車両が散乱、すさまじい光景でした」

しかし横山さんは「苦しいことも多かったが、おいしい中国のナシも腹いっぱい食つたし山水画そのままの美しい中国の風景もこの目で実際に見ることができまし



クリークに囲まれた敵陣の攻略は悪戦苦闘の連続

た」ともいつている。

一方、前衛本隊内にあつて呉宅を出発した第三大隊（上田孝少佐）は午後二時半、張家橋の戦闘で右第一線となり、前衛の右に連結しながら攻撃前進を命じられ、ただちに第一線に進出、敵の左翼を包囲するような形で攻撃、同五時五十分、正面の敵が退却し始めたので猛攻撃、同十一時、連隊本部とともに周基付近に達し、露営した。この戦闘中、第十中隊長の横井喜代蔵大尉（桑名市出身）は敵弾に倒れ後送途中で絶命した。

一方、第一大隊（渡辺綱彦少佐）は佐々木支隊（第三十旅団、佐々木到一少将）の右側支隊となり同日早朝呉宅を出発、本道の右一つまり呉宅―万福高―老呉市―徐家市―蕪浜市位家―固家―猛蔣廟向け前進した。午後零時五十分、徐家市に達したとき、重藤支隊通信班が前方約千呎の地点で敵の包囲作戦を受けていると聞き、ただちに救援に向かった。だが、すでに敵は退却していたので兵力を集結、蕪浜市―徐家市のクリーク沿いに猛蔣廟に進出、付近のクリークで敵の抵抗を受けたが間もなく撃破し、同八時には雁家付近に到着、ここで露営した。

翌弘暁、蕪浜市西南二^{キロ}の地点を敵二、三百が逃げて行くのを見つけ、ただちに第三中隊の一部が攻撃、さらに途中の部落を一個小隊で掃射して前進、同日午後五時、支塘鎮―常熟道を常熟向け前進中の本隊に追いついた。支塘鎮の戦闘で連隊は、横井大尉以下十四人（II 10、III 4）の戦死者と三十九人（II 20、III 19）の負傷者をだした。確認した敵死体は二百五十人だった。

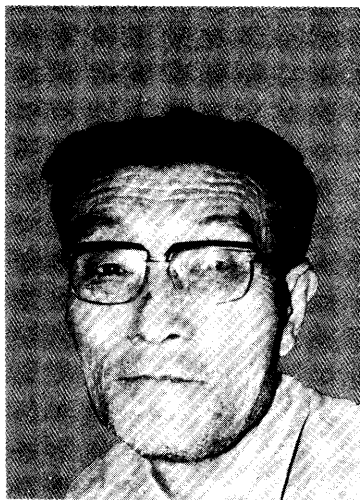
(三) 思わず「バンザイ」

敵弾、三品伍長の右肩貫通――

支塘鎮の戦闘

支塘鎮の戦闘で、上はく部から肩を貫通する重傷を負い、奇跡的に助かった三品広房さん(六六)＝桑名市鍛冶町で刃物店経営＝の話である。

十一月十三日、白茆口(はくぼうこう)岸に上陸、一夜をあかした三十三連隊は十四日午前七時、支塘鎮をめざして進撃を開始した。第一大隊は右側支隊となつて部隊の右翼に進出、二、三大隊は支塘鎮に至る本通を急進撃した。



三品広房さん

付近一帯はすでに稲刈りのすんだ水田地帯で、農家が点在する風景は内地そのままだつた。ただ違う点はクリークが無数に流れていることだつた。部隊主力が進む本道は中国軍が軍用路として最近つくつたものらしく、道幅は五、六メートルあつた。だが軍馬は輸送の都合でまだ集結しておらず、野田謙吾連隊長以下徒歩の行軍であつた。

歩兵はともかく、重い機関銃を担いだり、砲を引っ張つたりしている兵は並みたいではない。このため現住民

を微発して機関銃を担がせたり、水牛を捕え馬がわりに砲を引かせたりしたが、現住民は反抗的でいうことをきかず、水牛はクリークにさしかかると砲をつけたまま水中にとびこむ始末。それでなくとも気の荒くなっている兵士たちには頭にくることばかり。

午後一時ごろ、張家橋付近に差しかった部隊主力は、突然前方から射撃を受けた。先兵となっていた六中隊（辻四五郎大尉）がただちに展開、応戦した。白茆口上陸以来初めての敵の抵抗だ。敵は道路の両側にかくれ、パン、パン撃ってくる。だが敵がすでに浮き足だっていることは間のぬけた銃声でわかった。わが方がじりじり接近すると、一目散に後方部落に敗走しては抵抗を試みた。六中隊は十挺もあるクリークを渡ってすかさず追撃、道路左側の民家からチェコ式機銃を撃っていた敵をたちまち沈黙させた。

民家の前を流れる小さなクリークを渡りかけたときだ。ダダダ……突然、道路右側の松林（高地）から敵機



弾丸掃射の間の決死敵前渡行

関銃が激しくほえた。六中隊一小隊（横山孝三小隊長、久居市新町に在住）の三品正男伍長（のち広房と改名）は前進しようと、右手に握った銃を支えにし、からだを乗り出した時だった。その瞬間、グアッ！丸太棒でぶんなぐられたようなショックを胸にうけ、頭からクリークの底にぶつ倒れた。三品伍長は、ぼおつと目の前がかすむ中で、思わず「バンザイ」と叫んで気を失った。

「三品が背中から血をふいている」戦友のそんな声を聞いたようだ。

このとき、三品伍長と同じようにクリークからからだを乗りだした軽機手、大藪勇太郎二等兵（鈴鹿市高塚出身）も腹部貫通で即死、三品伍長の手当てにかけつけた水谷賢一上等兵（菰野在住）も鼻をやられるなど、たちまち五、六人が倒れた。仮包帯所で腹ばいにされて止血中の三品伍長は「これしきの傷！」と両腕に力をこめ、腕立て伏せのようにならだを支えてみた。だが右腕は痛むというより、しびれて自由が利かない。頭は鉛のように重く地面からあがらなかった。タンカで上海の野戦病院に運ばれた三品伍長に、親切な軍医（四国出身）は右肩こう関節左肩こう部貫通銃創と診断、「背中の中内出血部を切開手術する」といって、驚いた表情であらためて傷口をみた。敵弾は右肩を貫通して背中を一直線にえぐり、左肩からぬけていたのである。

「肩が動かないから腰のひもは結べない、腕を支えにして起き上ることもできない。人間の頭があんなにも重いものとは知りませんでした」と三品さんは当時を語る。

敵弾に倒れたとき「バンザイ！」とさけび、あとで戦友から「バンザイは早すぎた」とからかわれたが、実際そのときはバンザイとさけんでぶつ倒れた三品伍長がむくむく起き出したので、辻中隊長以下戦友は

おどろいた。

三品さんはその後内地に送られ、十三年四月津陸軍病院退院、三十三連隊補充隊に配属、十四年八月除隊、十八年十二月召集され、沿岸防備隊など内地に勤務、津連隊区指令部で終戦。曹長。

(三)

水さかずき交わす

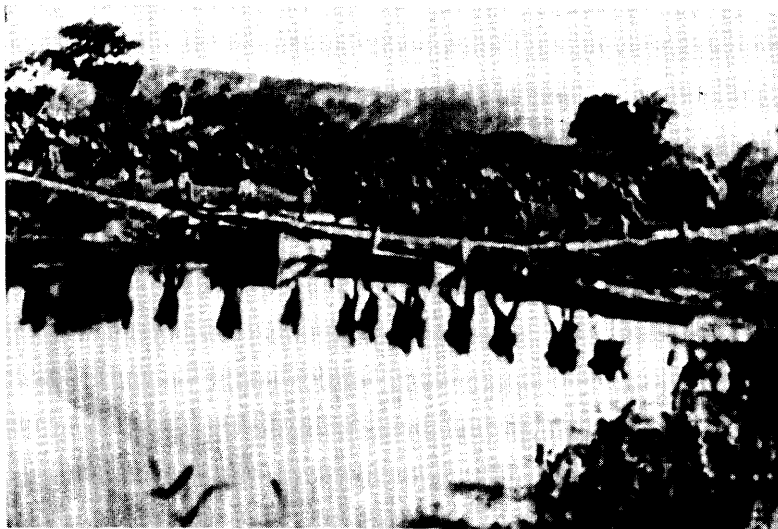
—— 第一小隊、第五中隊に復帰 ——

敵に猛射を開始

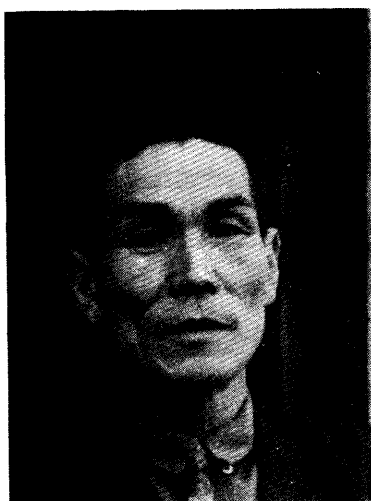
支塘鎮の戦闘

当時、軍曹で第五中隊第一小隊軽機分隊長だった田中俊夫さん（五十一年死去）『度会郡南島町東宮出身』もこの戦闘で奮戦した一人だが、生前次のように語っていた。

十四日早朝、第二大隊は前衛となり、支塘鎮めざし前進を開始した。軍旗を護衛して白茆口に上陸した第一小隊（奥野安次少尉、伊勢市出身）は依然軍旗小隊のまま午前四時出発した。南京公路は霧が深かった。



クリークで苦しんだ支塘鎮付近の戦闘



故 田中俊夫さん

付近は戦火で荒地と化した畑地帯。昼過ぎから第一線は戦闘状態に入った。敵はかなりがんだ強なのか、同二時ごろ第一小隊は原隊復帰の命令を受けた。奥野小隊長は後継の第三大隊に軍旗を渡し、第一線にかけつけた。途中クリークには敵兵の死体が折りかさなっている。逃げおくれた現地人たちが、壕にひそんでいる。彼らは壕の外に赤ん坊を放りだし、大人だけが穴に退避していた。戦線まであと百餘の地点に達したとき、だれいうとなく水さかずきを交わそうということになり、あり合わせの酒を回した。こうして第一小隊は、第五中隊に復帰、その最左翼に散開した。

わが方は、第五中隊を真ん中に左に第七中隊、右に第六中隊が展開、機関銃が援護している。敵は通路右側の松林に囲まれた高地から機銃を浴びせてくる。田中分隊は、道路左側にあたる独立家屋の左側にとりつき軽機をすえた。よりどころにした民家の土壁は砲弾で崩れおちている。射手の永富喜人上等兵（鳥羽市答志島町出身）が敵に猛射を開始した。

タッタッタッタ……

一秒間に五発、快音を響かせて敵陣にタマを送りこむ。そのうち「やられた」永富射手の絶叫。田中分隊長が調べると、水筒に穴が開いているだけ。

「なんだ、水筒が名誉の戦死しただけではないか」

ポンと肩をたたいてやると、

「そうですか。やれやれ」

彼はニガ笑いして射撃を再開する。

大隊命令は「白竜」が上がったら総攻撃せよ、つまりてき弾筒で白の発煙筒を打ちあげたら突撃だ。間もなく、白煙が上がった。

「突撃！」

田中分隊長は十四年式軍用短銃を構え、号令した。一步、立ち上がった瞬間だ。左肩をガツンとぶんなぐられたショックを受け、ひざを折った。時に午後四時、「おい永富、おれの左腕があるか」と思わずうめいていた。「くつついていますよ、分隊長」彼に腕をつかまれ、はじめて激痛を感じた。「田中やられたのかッ」民家のうしろで指揮をとっていた脇岡中隊長がかけつけ包帯をしてくれた。田中分隊長はチェコ機銃弾を三発受けたのだ。一発は水筒、一発は手首（腕時計の帯を切る）一発が左胸部を貫通していた。射出口からかなり出血している。部下の手当てのために、大連で買い込んだサラシ一反がまさか自分の負傷に役立つとは。

前後して弾薬手の種戸勝蔵上等兵（松阪市大河内出身、内地で病死）も負傷した。田中分隊長はタンカで野戦病院第三十二班に收容され、翌年一月一日広島に上陸、同十六日広島陸軍病院で、これも負傷入院中の脇岡直中隊長と再会、涙を流して抱き合ったものだ。

田中さんは昭和八年兵。この負傷で十四年六月兵役免除となった。「当時、上海戦線の敵は約三十万といわれた。わが国は嘉興―太湖と結ぶ線に百万上陸というアドバルーンを上げ、実は主力は白茆口に上陸、南京への退路をしゃ断する作戦のようだった。だがアドバルーンを上げるのが一週間早過ぎたため十六師

団が太湖の線に達するまでに、大部分の敵は南京に逃げのびていた。もし南京公路上でセン滅していたら戦争は一気に終局へはいっていたかも知れません」と残念な表情で語っていた。

【攻撃】攻撃ノ主眼ハ敵ヲ包围シテ之ヲ戦場ニセン滅スルニ在リ、攻撃、敵ノ意表ニ出ヅルノ度イヨイヨ大ナルニ従ヒ、其ノ成果マスマス大ナリ、其ノ予期セザル地点ト時期トニ於テ徹底的打撃ヲ加エ以テ速カニ戦闘ノ目的ヲ達成スルニアリ（作戦要務令第二部から）

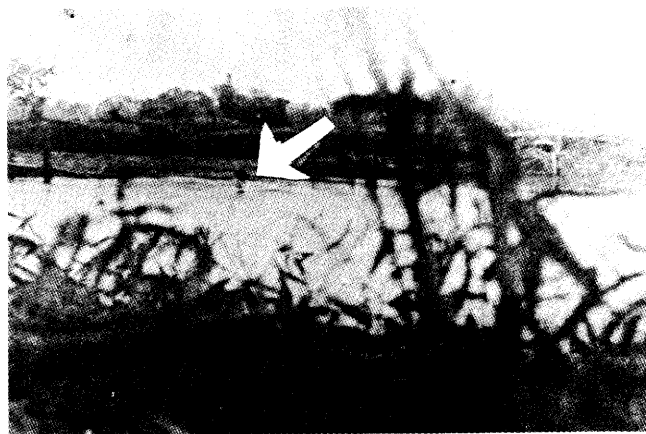
(三) 休みのない敵の攻撃

——クリーク手前でクギ付け——

常熟東方の戦闘

支塘鎮付近の敵をけ散らしたわが連隊は、十一月十五日常熟（チャン・シュ）めざして前進、同夜は常熟東方約八^キの地点に迫つて露営した。

常熟は常熟県の県城で蘇州の北方約六十^キに位置し、四方に運河、河流が通じる水利に便な土地。人口は七、八千だが、付近一帯は米、綿花の有名な産地で、その集産地として大きな城壁を構えた大きな町である。上海を失つた中国軍として



敵前渡河 弾丸雨飛の中

は、早くから準備したこの蘇州―常熟―福山を結ぶ陣地線、さらにその後方無錫、江陰の線は、首都南京を守る堅固な陣地で第二線とたのむ防備線であった。常熟には九十六師、九十七師（兵力は計約二万）を配していた。

一方、日本軍は嘉興、抗日の機密室ともいえる蘇州にも迫っており、その要線もいまは風前の灯（としび）であった。常熟東方に迫ったわが連隊は十五、十六両日は同地にとどまって敵情を搜索、十七日未明に行動を起こした。だがいたるところに横たわるクリーク、その沿岸の敵陣にてこづっている間、十五日には早くも佐藤部隊によって完全に占領されたのである。

○ ○

十七日未明、行動を起こした連隊は、先行の第十二連隊（丸亀）と交代して第一線に進出した。本道上の第三大隊を中に、第二大隊が左翼に、第一大隊が右翼に展開、前進する。

朝から冷たい雨だった。同日午後七時半、歩兵第十二連隊第二大隊と交代し、常熟東方約四^キの青塘（せいとう）に進出した第三大隊（上田孝少佐）は前方の幅三十^ミのクリークにぶつかった。付近には小部落があり、民家の回りには高い立ち木もある。

敵は本道の橋を落とし、その対岸にはトーチカ陣地を構えていた。上田大隊長は第十一中隊（松野亮作大尉、のち大別山で戦死）にトーチカ奪取を命じた。同中隊は直ちに攻撃に移ったが敵の攻撃は激しく、同夜はクリーク手前にある五、六戸の民家までたどりついたまま釘づけになってしまった。

翌十八日も、早朝から機関銃小銃でトーチカに銃眼攻撃をかけたが、敵はびくともしない。戦況ははか

どらぬまま第二日目も暮れた。このままでは連隊の作戦に狂いが出る。松野中隊長はついに決死隊による肉弾攻撃を企画した。同夜民家の戸板や丸太を集めてイカダを作った。

翌十九日未明、松野中隊長は部下を集め「長男ではない者は手をあげよ」といい、いつせいに手をあげた数十人の中から中村正二軍曹（員弁郡出身）伊藤政伍長（松阪出身）平野一等兵（伊勢市朝熊町出身）ら六人を選び、決死隊の任務を命じた。第一小隊第一分隊長だった吉田堅次郎さん（名古屋市）の記憶では、決死隊はあたりが白みはじめた頃から行動を起こした。軍服を脱ぎ捨てると、深さ約二メートルのクリークにからだをつけた。そして各自の小銃と手投げ弾をイカダに乗せ、ひそかに前進して行く。決死隊の姿は、岸の草にさえぎられてよく見えないが、伊藤伍長は勇敢にもふんどし一つになり単独渡河だ。

こちらの岸では、決死隊を援護するため中隊主力が重機をはじめ手持総火力を構えている。しかし敵は渡河に気づかないのか、あまり撃ってこない。数分後、対岸には六勇士の姿が現れた。すばやくトーチカ



渡河作戦を指導する松野亮作中隊長

めざし駆けあがる。駆けあがったとみるや、トーチカの裏側に回り、手投げ弾を投げつけた。銃眼から白煙が吹きだす。成功だ。がん強だった敵トーチカもついに沈黙した。

こうして第三大隊はただちに追撃隊前衛となつて前進に移った。途中青塘西端橋りようが破壊されていたため前進を阻まれたが、二十日午前六時には通過、北庄を経て常熟南方交差点で連隊本部に合流、以後無錫に向かい追撃した。

【中国軍の編成】集團軍（C A）軍（A）師（D）からなる。師は、普通歩兵三個団（日本の歩兵連隊にあたる）を基幹として事變当時はこれに砲兵団（野山砲級二十四—三十六門）工兵營などがあつたが、十三年十月ごろ以降は砲、工をはずして軍で運用するようになり、師は外国の歩兵師団のようなものとなった。

火力の中心は迫撃砲と機関銃。人員は七千から九千人、少ないのは五千人程度で中央直系、中央傍系、地方軍、雜軍など各種各様であつた。軍は通常三個師で編成、戰略運用の単位、日本の師団に該当、十五センチの弾砲など野戦重砲兵の一—二個団（二団十六—二十四門）を持っていた。集團軍は通常は二、三個軍で編成、日本の軍に該当した。

（三） 夜明を待ち猛攻

——敵も死にもの狂いで抵抗——



第二中隊長だった比日野茂夫中尉

軍公路を西に向け進撃中の第二大隊（三浦俊雄少佐）Ⅱ中隊欠Ⅱは、十七日午前一時、支隊直轄となり湖田に進出、その一個中隊を五渠鎮（ごきょうちん）に出して敵情地形を搜索した。この部落にも相当の敵が抵抗線を敷いていた。十七日午後、三浦大隊長は第五中隊（肱岡直大尉）を先遣させ、攻撃、掃討するよう命じるとともに、主力も前進を開始した。以下は主として肱岡さん（鹿児島県出水郡出身）の記憶による。

命令を向けた肱岡中隊はクリークに沿って、その左岸を前進した。前項で述べたように、その日未明から降りだした雨で道はぬかるんでいた。午後五時頃、射撃を浴びせてきた数人の敵をけ散らし、五渠鎮の部落に侵入、十六日索敵に出て、そのままこれと対陣中の第二中隊（比日野茂夫中尉）と第一線を交代した。第二小隊長（少尉）だった川村可夫さん（七）Ⅱ一志郡嬉野町宮古Ⅱの話では十六日午後三時ごろ五渠鎮手前の沙上を占領、十七日同夜中隊主力到着、十七日午前零時ごろ、五渠鎮一部落を占領、十七日午後第五中隊と交代したという。

民家にとりついた中隊は、川幅約三十メートルのクリーク対岸から激しく射撃された。五渠鎮は常熟の東南約四キロにあり、クリークを距てて東西両岸に数十戸ずつ、レンガべいの民家が並んでおり、中央に幅五メートルほどの橋がかかっていた。ちよつとした町だ。東岸の敵は西岸に逃げたので東岸

の家屋はたやすく占領したが、ちよつとでも川岸や橋のたもとに顔をだすとたちまち集中射撃を受ける。なにしろ、敵の顔が見えるほどの距離だ。クリークは満々と水をたたえ、小舟が一、二隻あるが、どれも敵岸につながれている。ほかに渡る場所もなく、渡河用の資材もない。両軍ともクリーク沿いの民家を陣地にして、レンガ壁に銃眼をあけて撃ち合ったが、間もなく夜に入った。

午前十時、湖田を出発した大隊主力は、午後三時には北部沙上に到着、工兵一個小隊と旅団無線一機を配属され、終日敵と交戦しながら進出してきた。連隊砲も進出したが、敵味方の距離があまりにも近すぎて援護射撃をすることが出来ない。三浦大隊長は十九日払暁攻撃を企図した。翌未明、肱岡中隊の第二小隊長、小宮忠生准尉（安芸郡安濃町出身）は勇敢にも強行突破を図ろうと橋のたもとに飛びだしたとたん、頭を狙撃され、戦死した。

夜明けと同時に、大隊主力も加えて猛烈な攻撃をかけた。だが敵も死にもの狂いで激しく抵抗、両軍とも民家にこもって交戦を続けたまま、わずかに南五渠鎮の一角を占領しただけで、第二日目も暮れてしまった。しかし同夜のうちに敵は退却、二日朝大隊は追撃に転じ、常熟―無錫道に出て、連隊主力と合流した。

一方南湖に集結していた第一大隊（渡辺綱彦少佐）は十七日午後四時四十分、黄涇石基上方向から石敦（せきとん）の敵陣地を攻撃せよとの連隊命令を受け、第一中隊（田中嘉衛中尉）を石基上に、主力を黄涇に集結し、前面の敵情を搜索した。

しかしこの方面でも攻撃ははかどらず、十九日払暁になって、やっと敵は退却の気配をみせた。

大隊主力は午前八時四十分、石基上の北端に展開、クリーク対岸のトーチカを鎮圧し、午後三時石敦を占領、大隊は夜陰に乗じて第三中隊（工兵属す）に前面部落のトーチカ五個を攻略させ、二十日午前三時三十分、三里橋に前進、連隊主力と合流した。

常熟東方地区（五渠鎮、石敦湯庄）の戦場で、連隊は戦死七（II 1、III 6）負傷二十九（I 6、III 23）の損害をだした。

（元） 速射砲を背負い

——2カ所に砲陣地を構築——

常熟東方の戦闘

この戦闘で速射砲中隊は十八、十九日を通じ、敵近距離に陣地を選定、トーチカ銃眼射撃によって第一線に有効に協力した。同中隊第二小隊第三分隊の三番砲手兼伝令（一等兵）だった岡賢三さん（六六）津市新東町一七一、三重中央水産副社長Ⅱにとって印象に残る痛快な戦闘だった。この戦闘で、同中隊は殊勲甲の功績に輝いた。

十月十七日、小雨の夕方だった。中島純雄中尉（熊本県天草市出身）の率いる速射砲中隊は第一線に出た。部落に着くとわが部隊と前線を交代して下がってくる十一師団（善通寺）の将兵たちに出会った。軍服は破れ、泥にまみれた姿は勇敢な日本兵とは思えないほど疲れきったかつこう。そして無表情だが口々に「敵は手ごわいぞ、気をつけて行けよ」と、あるものはうわごとのように言い残し、ふらりふらりとか

らだを引きずって通り過ぎていく。思わず顔を見合わせる郷土部隊の兵士たち。その百五十メートルから二百メートル前方の地点に敵砲弾がサク裂する。

ヒュルヒュル

無気味なうなり音に思わず地面に伏せた岡一等兵のわずかに二メートルの前に不発弾が突き刺さった。(敵弾が近づいたぞ!)身を起こした岡一等兵は中島隊長に報告。「中隊全員外へ!」中隊長命令が飛ぶ。あわてて民家の外へとびだす兵士たち。その後二、三発の敵迫撃砲弾が民家に命中したのだった。

その夜、速射砲中隊は前方クリーク対岸の右側にブラツと配置され敵トーチカを攻撃せよ、との命令を受けた。これまでの華北と違い、いまは首都南京を直接おびやかされている中国軍は、本道沿いの至る所にペトン製トーチカを構え、歩兵の前進を阻んでいた。クリークの対岸には必ずトーチカを配備している

ほどだった。この敵トーチカの攻撃エースが速射砲だった。

話はわき道にそれるが速射砲は口径三七ミ、最大射程四千メートル、千メートル(有効射弾距離)以内の近距離なら優秀な砲手が撃てば百発百中だった。速射砲はリュウ散弾(瞬発)として甲弾(撃ちぬいてから破裂)の二種の弾丸があり、りゅう散弾はおもにトーチカの銃眼射撃、てつ甲弾は対戦車、対装甲車用だ。速射方の弾道は一直線(水平)であるため、常に歩兵の前に出たが、それでも中には味方の歩兵を傷つ



岡 賢三さん

けた速射砲もあった。つまりリュウ散弾は草一本、毛髪一本でもかすめれば瞬間に破裂する。敵銃眼をねらって発射した弾が土マンジュウ（盛り土）の先端をかすめたために破裂、土マンジュウのかけで攻撃中の味方歩兵に戦死、戦傷を与えた実例もあった。

さて、夜十一時ごろ、中島中隊長は部下二個分隊（二十五、六人）を率い、陣地の構築に出發した。朝からの雨はまだけむっており、むろんまっくらヤミ。兵士たちは軽装となりシヤベルと円ピだけを持ち、足音を忍ばせて進む。三百メートルほど行くと約十五メートルのクリークにぶつかると、橋は焼けおちているが、さいわい橋ゲタだけは残っていたので、はうようにして渡る。速射砲は分解して、それぞれが背負った。さらに百メートルも進んだ本道上に、中島中隊長は二カ所の砲陣地構築を命じた。敵トーチカの前面に、かなり接近したことは確かだが、まっくらやみなのでどこにあるのかさっぱりわからない。兵士たちは緊張した。音をたてないように穴を掘りはじめた。砲の固定と敵砲撃から砲を守るため長さ約三メートル、幅一・五メートル、深さ約五十センチの穴を必要とした。雨で地面がゆるんでいるとはいえ、暗夜にシヤベルの音を消しての作業は並みいた



すまん、すまんと人柱橋を渡って攻撃前進

ていいではない。

コチン

シャベルが石をはじこうものなら、とたんにダダダダ：敵機銃がいつせいにほえた。兵士たちはぱっと身を伏せ、思わず息を殺す。二、三分で射撃がやむと兵たちはそろそろと穴掘り続ける。敵機銃はちやうど番犬みたい、一度撃ち方をやめても、じっと耳をすましてうかがっており、わが方の気配を感じては、バリ、バリ、バリ……

と乱射してくる。時刻は容赦なく過ぎていく……

(三) 兵士は緊張の極に

——タコつぼで日の出を待つ——

常熟東方の戦闘

二カ所の陣地と各自のタコつぼを掘り終えたのはもう午前三時前（十八日）だった。すぐ引きかえしてこんどは砲の進入だ。音のしないよう車輪にナワを巻き、馬を使わず、兵が引つ張った。まっくらやみの中、クリークの橋げたに戸板をかけ、二門の速射砲を渡す作業は難事だった。兵士たちの緊張は極に達し、砲を支える両腕の筋肉はギリギリと盛り上がり、闇の中で額のあぶら汗をぬぐった。

砲は防楯（ぼうじゅん）と車輪と砲口だけを地上にのぞかせて、陣地にどっかりと構えた。時に午前三時半、兵士たちは各自のタコつぼにひそんで日の出を待った。

空が白んできた。タコつぽからそろつかま首をあげた兵士たちはドギモを抜かれた。本道の右、わずか二百呎の距離に五、六個の敵トーチカがずらりとならんでいたのだ。さらにその右手、約七百呎の地点にも二個のトーチカが無気味な姿を見せていた。ヤミ夜のこと、敵に接近していたことは知っていたが、まさかこんな近距離で陣地の構築作業をやっているとは気がつかなかった。兵士たちはあらためて冷汗をぬぐうとともに（やつつけるぞ！）とこぶしを固めた。

「前方のトーチカを射撃！距離二百」

待ちに待った命令がとんだ。タコつぽからおどりでた砲手がすばやく装弾（三番砲手）し、照準（四番砲手）を合わす。

ガタンッ！

耳をつんざくばかりの発射音、二門の砲がいつせいに火をはいた。命中。わが砲手の腕に一分の狂いもなかった。わずか幅三十呎、深さ一呎ほどのトーチカ銃眼にリュウ散弾は一直線にとびこんだ。砲弾はトーチカの中でザ



クリークと湖を防壁とした敵陣地の跡



クリークを砲車の搬送に精出す兵士たち

クロのようにバリツと破裂、銃眼から白煙を吹いた。二発、三発：つるべ撃ちに撃ち込むとすぐさま隣のトーチカを狙う。一発のムダもない。一分間に十五発も撃てる速射砲のこと、ものの二、三分でたちまち前面のトーチカを制圧した。

一分間に十五発も撃てるが、十発も撃てば砲身は真っ赤だ。油を流し込んで目標を後方七百メートルのトーチカに移す。千メートル百発百中の速射砲、七百メートルの目標なら正確に銃眼に命中だ。これも制圧。平時なら顔をそむけるだろうが、戦場という雰囲気の中の兵士たちには、まったく痛快な気分だった。

しばらく砲を休めていると、敵兵がこそごとトーチカに入りこむ気配。これを見のがせば、たちまちこっちが機銃を浴びる。すぐ撃ち込む。二時間も戦ったろうか。敵はとてまかなわぬとみたのか敗走して行つた。

ところがよろこびもつかの間だった。アタマにきた敵は、いったん下がって、野砲でリュウ散弾の集中砲火を浴びてきた。さすがの速射砲も射程の違う野砲にはかなわない。兵士たちはタコつばにもぐりこんだ。中隊長づきの岡賢三一等

兵は中島中隊長のタコつぽに戸板をかぶせ、その上に土を盛り上げた。敵は撃ちつづけてくる。兵士たちはタコつぽの中で身動きもとれず、朝の占領から午後二時ごろまで気長にひそんでいた。やっと友軍の十五^セカノン（加農）砲がうなりだすと、さすがに敵はなりをひそめた。

砲は地上に出ていた防楯や車輪が傷だらけ、兵士たちも敵砲弾さく裂時に吹き上げられたドロで、まったくドロ人形だった。それでも一人の負傷者もでなかったのは奇跡に近い。

敵野砲の集中砲撃にこりた中島中隊長は、以降の戦闘はすべて本道上を進まず、山道や水田、クリークを選んで分解搬送した。おかげで兵士たちはふうふういったものだ。岡賢三さんは「ともかく中島中隊長は機転のきく、頭のよい人でした。いままとお元氣でときどき便りをしています」と語っている。

さて、速射砲中隊は翌十九日もトーチカ攻撃を続け、歩兵の前進を助け、首都南京をめざして進撃した。

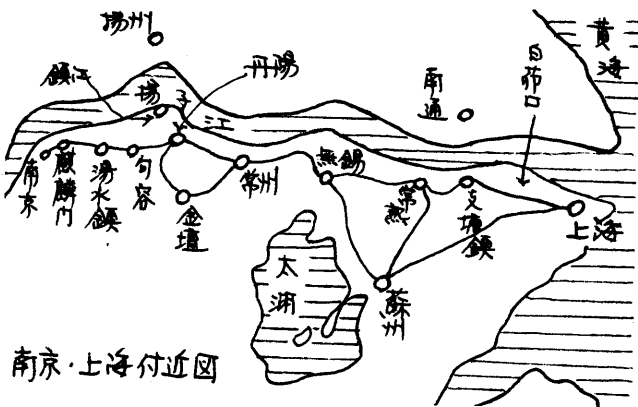
(三) 波乱万丈の岡さん

——酒を飲み中隊長に説教——

常熟東方の戦闘

当時速射砲は「新兵器」の部類だった。初年兵の岡賢三さんは久居にいる頃、午睡時間一時間を返上して砲の分解や組み立て方を訓練した。このため出撃当初、中隊で砲の分解ができるのは岡さんひとりだった。初年兵ながらプライドをもっていた。これが緒戦でわざわいした。三番砲手だから、点検、装弾、距離測定が任務だった。ところが、はじめて撃った貴重な砲弾は一発、二発とも不発だった。弾の暴発をお

それすぎて安全ピンを完全に抜きとらず装てんしていたのだ。中隊長、中島純雄中尉の軍刀が岡一等兵の頭上にうなった。「バカ者！三番砲手交代」お役ご免だった。以後、徐州戦で中島中尉が転属するまで岡一等兵は中隊長当番（伝令）ばかりをつとめさせられた。



南京・上海付近図

だが、三番砲手の籍もあるため困ったこともあった。無錫（むしゃく）の戦闘後中隊長に卵を食わせようと鉄カブトいっぱい卵を徴発して帰ってみると中隊は出発したあとだ。敵中においてきぼりほどこわいことはない。分隊では「岡は中隊長のところだろう」と早合点し、中隊では「岡は分隊だろう」と二重国籍のつらさ、中隊は確認せずにどんどん行ってしまったものだ。

あわててかけだすとクリークにぶつかった。橋は落ち、十数人の丸太が渡してあるだけ、敵の流れ弾はビュッビュッと飛んでくる。仕方がないので卵の入った鉄カブトを左わきにかかえ、右手で丸太にしがみつかながらそろりそろり渡った。いまなら想像しただけで吹きだしそうな図だ。「あんな心細いことはなかった」と岡さんはニガ笑っている。

岡一等兵は酒がはいると中隊長の世話を放っぽりだして歌がなったり、中隊長に説教（？）したりした。腹を立てた中隊

長が軍刀を抜き放って振り上げたことは一度や二度ではなかった。岡一等兵は酒乱だったわけではなく、中島中隊長が部下にとつてそれほど親しみやすい人であったわけだ。中島中隊長が在任中、岡一等兵を身辺から放さなかったことからでもいかに岡一等兵を信頼していたかが分かる。さっきの卵のように、岡一等兵も中隊長によく尽した。

中隊長中島純雄中尉は熊本出身、当時二十五、六歳の若さ（岡さんは二十一、二歳）だったが、さすがに「恩賜の軍刀」組だけのことはあった。剣道四段、柔道初段の腕は戦場でさえた。彼はいつも歩兵の先頭に立ち、敵情偵察をした。岡一等兵が安否を気づかって付き添おうものなら「危いから貴様はどうしておれというに」と、クツを振り上げた。目は鋭く、カンに狂いはなかった。敵の銃眼がいかに巧みに擬装していても、たちまち見破った。「あそこを撃て！」と指さす草むらに、部下たちが首をかしげながら発射すると、着眼点はたちまち擬装が吹つとび、銃眼をむきだした。こんなわけで部下は絶対の信頼をおいていたし、中隊の損傷は少なかった。

岡さんは紫金山の戦闘で、占領後岡村少尉（松阪出身）が敵の流れ小銃弾で戦死したのだけを覚えているぐらいだ。

「常熟東方でもわれわれはどれだけ敵に近接しているのか分か



道路上が危険、河中の前進風景

らなかったが、中隊長はちゃんと承知の上でやったことだろう。たしかにりっぱな人だったが、自慢するのが玉にキズだったね」と評している。

岡さんは常熟の戦闘のほか、北支、徐州の行軍、無錫、紫金山の各戦闘が印象にのこっているという。昭和十二年一月の徴兵検査で三十三連隊に入隊、支那事変に参加、連隊と最後まで行動を共にし、十四年に帰還、除隊した。大東亜戦争は終戦の一カ月前、二十年七月十二日に召集され、久居で編成された高師部隊に属して九州鹿児島で陣地構築の任務に当たった。当時伍長（分隊長）だったが終戦の三日前、弾薬節約のため禁止中の銃を持ちだし、キジ狩りの最中を師団長に見つかり降等を覚悟したが終戦で免れた。

(三) 大藪一等兵が戦死

——小山
一等兵 人生のはかなさを知る——

常熟東方の戦闘

戦友の最後を語る小山静一さん(六〇)熊野市本町、旅館「一松」経営は、一等兵で第七中隊(のち大隊本部付)に属していた。

大隊は佐々木旅団長直轄で、将兵は張り切っていた。だがクリーク対岸の敵陣に阻まれ、クギづけになったまま敵迫撃砲弾の弾着は正確だ。やむなくクリークがカーブになった地点に壕を掘りひそんだ。

十八日も暮れようとしていた。何時頃だったろうか。すぐ隣りの壕へ移ろうとしてからだを乗りだした大藪義典一等兵が、ソ撃弾を腹に受け、もんどり打って壕に突っ込んだ。腹部貫通で、出血は割合少な



大藪義典さん

ったが、非常に苦しんだ。「大藪ッ」小山一等兵は、われを忘れてかけ寄ったが、ムシの息だった。初年兵当時の親友で彼は北海道出身、上品な家庭の育ちだった。日ごろから「戦争なんてどうだっていいんだ。早く内地へ帰りたい」と、母親ひとりだけの故郷を思い出していた。親友を失った小山一等兵は、夢のようなさびしさ、人生のはかなさをしみじみ感じた。勝ちいくさで戦死していった大藪はさぞ無念だろうとくやしい涙をこらえた。

小山さんは大東亜戦争では十八年十二月召集、安部隊でビルマへ、タイメン国境付近で終戦、抑留生活後二十一年八月復員。

◇ ◇ ◇

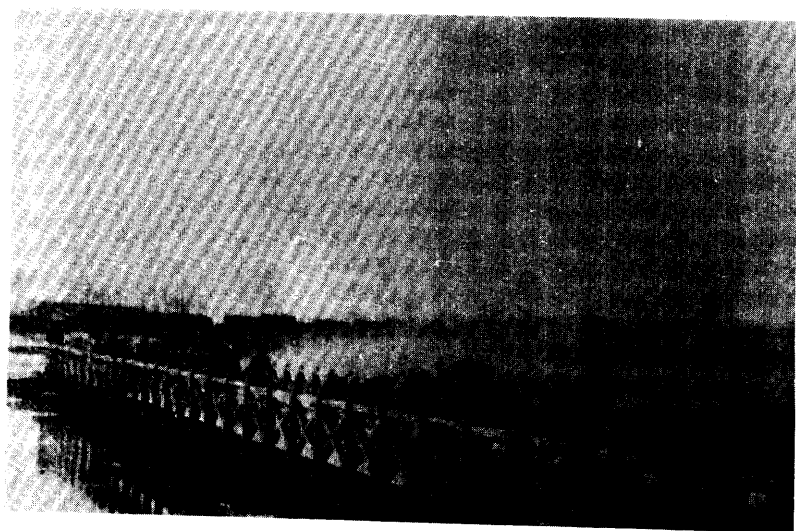
第一大隊付衛生准尉だった山崎仁さん(七〇)「熊野市大泊町」の忘れられない思い出話をひとつ。

たしか、常熟東方の戦闘だった。仮包帯所にあてた民家の倉庫には、第一線から約三十人の死傷者が急造タンカでつぎつぎ運ばれてくる。小倉(芦屋市出身、故人)渡辺正(津市魚町)両軍医と手分けして重傷者から第一救護法を施す。ロウソクの灯が頼りだが、わずかなこの光を見て敵は夜光弾、続いて迫撃砲弾を集中してきた。腹部をやられた兵がうめきながら胸をかきむしる。クチビルはすでに紫色に変わり、カラカラだ。脱脂綿に水をふくませ、クチビ

ルをぬらしてやりながら「痛むか。胸が苦しいか」と声をかけるとかすかに首を振る。胸をあけてやると、内ポケットから妻と子の写真が出てきた。これだなど、渡してやると、きつと歯をくいしばり、じつと写真を見つめる。涙ぐみ、やがて目を閉じる。それが最期だった。こうして仮包帯所にかつぎ込まれた者のうち十四、五人が戦死していった。

翌朝、本隊は次の敵陣めざして前進した。山崎准尉と衛生兵一人は「患者を処理したのち、本隊を追及せよ」との大隊命令で、軽機一丁を持つ一個小隊に護衛され、現地点にとどまった。霜のおりた冷たい朝だった。患者を後送し、戦死者の処理を始めた。畑に穴を掘り、死体を並べる。民家の戸板をはずして火をつけた。山崎准尉は一人一人手帳に名前をメモし、飯ごうに骨（のど笛の部分）を納めた。現場に仮の墓標を立て、野菊の花を供えた。

この作業中だった。ふと近くで赤ん坊の泣き声を聞いた。



前進前進も馬も人もへと熟常へ熟常



小山静一さん

たように思った。不審に思つてあたりを探すと、すぐ近くのワラ塚のかげに見つかった。誕生前後のかわいい女児だった。ズキンをかぶせてもらい、ふとんにくるまっていた。手は霜やけで真っ赤になっている。母親は、日本軍の進撃を知つて子どもだけ残して山へ避難して行つたものだろう。山崎准尉は、胸にこみ上げるものがあつて、立ちつくした。内地には幼稚園に行つてゐる長男と、この女の子と同じ年ごろの二男がいたからだ。「よしよし」かがみ込むと、ポケットからキャラメル(慰問袋でもらつたもの)を一箱とりだし、握らせた。「ああ、そうか、ひとりでは食べられないね」と包装紙を破つて口に入れてやる。赤ん坊は泣きやみ、キャラメルをしゃぶりながら不思議そうな表情で見上げた。くるくるとした目だった。

「いい子だね。おじさんが立ち去つたら、きつとお母さんが帰ってくるからね、じつとしてゐるのだよ」もちろん話が分かるうはすがないが、頭をなでて立ち上がった。

「山崎准尉殿」

と部下の叫ぶ声。うしろ髪を引かれる思いで離れた。「この子がその後どうなったか、望みがかなうものなら、一目あいたい」

と、回想していた。

(三)

突然、敵の機銃が

——死傷者続出し小隊は離散——

常熟東方の戦闘

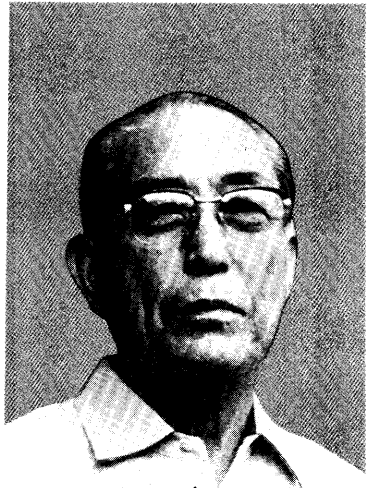
三四四

津市伊倉津、木工所経営、伊藤実さん(六七)にとつても常熟東方の戦闘は忘れられない。第二中隊(比日野茂夫中尉)第二小隊の軽機分隊長(伍長)だった。

既述のように十六日索敵に出た第二小隊(隊長川村可夫少尉、一志郡嬉野町宮古)は同日午後三時頃、五渠鎮(ごきよちん)手前の砂上を占領、夜になって中隊主力が到着、十七日午前零時、五渠鎮の一部を占領、午後五時中隊と第一線を交代した。

十六日のことだったと記憶する。その日も雨だった。午後三時ごろ一部落(沙上?)を奪取した川村小隊は、さらに約一^キ前方の五渠鎮の一部落に前進、夕方近く普通の隊形で道路上进行した。突然、前方と左方のクリーク対岸からチェコ式機銃を浴びせられた。あつというまに死傷者続出、小隊はちりぢりになってしまった。川村小隊長のそばにいた伊藤分隊長は、小隊長とともに民家にかく込んだ。あたりは暗くなっており、敵情地形はくわしく分からない。川村小隊長はまず部下を掌握するためラッパを吹かせたが、部下はいつこうに集まって来ない。

死傷者を早く収容しなければいけない。川村小隊長は同夜十時ごろ「伊藤、お前兵を連れ大隊本部まで連絡に行つてくれ」と命じた。「はッ」と答えた伊藤伍長。いったい自分たちがどの方向からきて敵はどの方向にあるのか、まったく分からない。大隊本部は後方に位置しているのだろうが、その地点がどこかわからない。川村小隊長も同じこと「行け」と命令したが、どの方向へどうやって行けとまでは指示しない。



川村可夫さん

「水さかずきをしよう」

川村小隊長が重い口調でいった。伊藤伍長が長男で一人っ子であることを川村小隊長は十分知っていた。だが、決死の任務をぜひ彼にやってもらわなければならなかった。

伊藤伍長は道路上を下がるのを避け、田んぼの中を行くことに決めた。部落から田んぼにでるまでをどうするか。

自分と任務をとにもするのは松阪市出身の世古、三重郡菰野町出身の伊藤両一等兵。三人は十字鋤を準備し、それで

一軒一軒民家の壁をぶち抜き始めた。真つ暗やみでの作業である。一つぶち破つては、次の民家に敵がないかを確かめてから土壁をくずす。最も神経をとがらせたのは、果たして味方の方へ進んでいるかということ。うっかり敵の方向へ向かっているのだつたらたいへんだ。

こうして十四、五軒の民家をぶちこわし、田んぼに出たときにはほつとした。

これからが苦労だ。腰の短銃を握りしめる伊藤伍長を真ん中にはさんで、世古、伊藤一等兵の三人はひとかたまりに寄り合い、どろどろの田を、後方とおぼしき方角をめざし、はって進む。雨と泥、三人は文字通り泥人形、荒い息で所在を確かめあつては先を急ぐ。

もう何時間ぐらい田をはい続けたことだろうか。かすかな物音！三人はぎくつと止まり、泥の中に伏せた。確かに人の動く気配、じつと息をこらす。泥に突つこんだ手足の感覚はない。ガチャリ、金属音が凍

った手足の先までピリツと走った。撃テツを起こす音だ。敵か味方の歩哨か。前方の影も音を消した。雨の音がにくらしい。(おれは死を覚悟で出発したのではなかったか)ハラを決めた伊藤伍長は「日本兵だッ」と、どなった。「なんだ」前方の影が動いた。(やれやれ)友軍の歩哨だった。三人は大隊本部の位置を聞き、さらに途中味方の銃声におびやかされながら、やっと夜明け近く本部にたどりつき、小隊の状況を報告、軍医の派遣をたのんだ。

「わずか一^キ余りを下がるのに五時間もかかった。私たちのあと同じような連絡兵を四、五回だしたそうです。夜明け方軍医を連れて復帰したが、小隊の戦闘力はほとんどゼロに落ちており、後続中隊と戦線を交代したものでした」と伊藤さんは回想する。

この二、三日あと民家でたき火をしたところ敵の迫撃砲弾に狙われ、世古一等兵ほか一人が戦死、四人が負傷、伊藤さんも肩に端片きずを受け後退、南京入城のとき復帰した。昭和十年兵。十九年四月召集され、近衛第二連隊で東京警備中に終戦となった。伊藤さんは「あの頃の困難が、その後の人生を切り開くのに役立ちました」と語り、転戦の跡を克明に地図にかき、軸にして保存している。

なお川村可夫さんは、当時の部下たちの労に報いるため、賞詞を銅板に掘り込み、楯にして一人一人に贈った。



伊藤 実さん

(言)

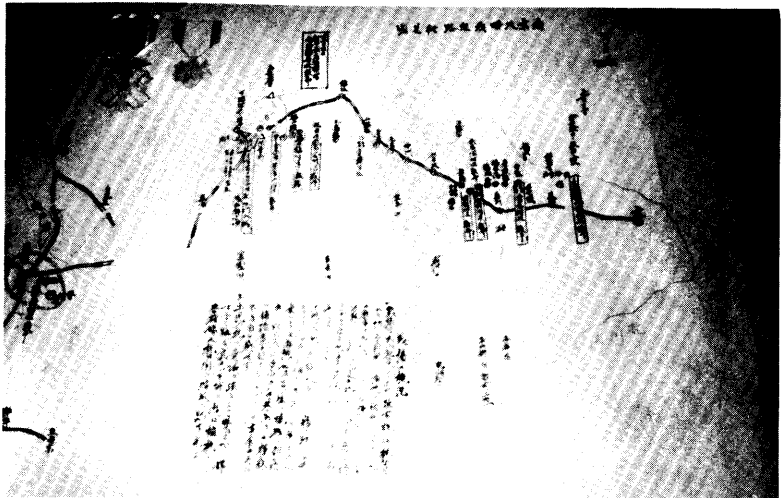
休む間もなく無錫へ

——連戦連勝の進撃つづく——

無錫東方の戦闘

常熟東方の敵を破った三十三連隊は、二十日朝再び本道上に全兵力を集結した。だがこのころすでに目指す常熟は友軍によって占領されていたことは前述した通りだ。このため連隊は雨にけぶる常熟城を右にながめながら休む間もなく追撃に移った。次にめざすは無錫（むしゃく）であり、首都南京である。いよいよ南京攻撃戦（十一月下旬の追撃から十二月十三日の南京陥落まで）参加である。同作戦で第十六師団は一三、九、三、六、一一四、一八の各師団、岡崎支隊の友軍部隊とともに戦った。

無錫（ウー・シー）の県城は蘇州の西北、京滬（けいこ）鉄道上にあつて、上海から約百二十六^キ、南京から約百八十^キの地点にある。西南に太湖、西方に錫山がひかえているが、東北、南北、南は一望の江南大平野であつた。人口



伊藤さんが作った戦跡図の掛軸

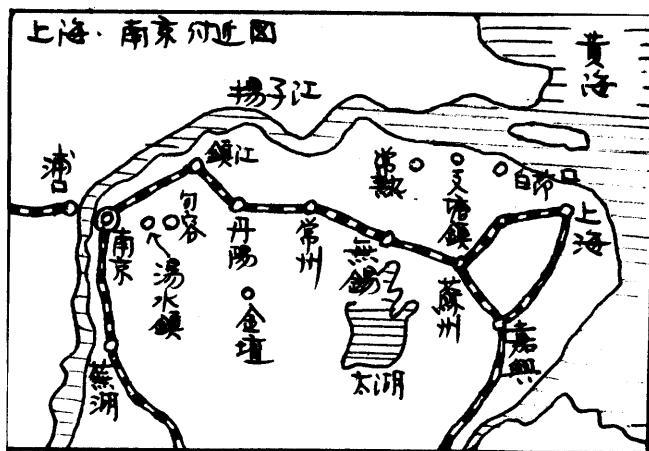
十数万の城市で、農産物と生糸の集散地、そして中国でも有数の工業地帯である。

蘇州（十九日陥落）および常熟の線を守り切れず、西へ敗走した中国軍は、この無錫の堅陣で相当の抵抗を試みるだろうと予想されていた。ところが敵は案外もろく二十二日午前十一時半には早くもわが新鋭

部隊が突入、浮き足だった敵大部隊は鉄路、街路上をなだれを打って常州方面へ退却していった。これを追って陸海空軍は痛撃を加え、敵に大きな損害を与えた。わが新鋭部隊は、時を移さず京滬線沿いに追撃、上海—南京約三百キロの鉄路の二分の一は日本軍の手に落ちた。

前衛となつて大進撃を続ける第一大隊は二十一日午後二時ごろには無錫の東方約二十キロの間上に達した。そこから、前方約五キロ、本道右側にある吼口山（ここうざん）の敵右側背をおびやかすため、同二十分本道左側に入つて大平橋向う回を始めた。夕方大平橋部落の後方三百メートルに近づいたとき、突然同部落から射撃を浴びせられた。直ちに第二、第三中隊から各一個小队をだして攻撃、難なく占領した。一部を塘西（とうせい）に攻撃させ、主力は同地で露営した。

翌二十二日早朝、塘西の敵を攻撃し、午前九時ごろ占領、そ



こから再び西に向け前進、午後三時半には連隊主力と合流、鴨城橋で宿営した。二十三日も前衛で前進、午前十一時半、謝家村（しゃかそん）とその後方陣地長大夏鎮（ちようだいかちん）を攻撃、がん強な敵陣になぐりこみ、日没ごろには長大夏鎮の一角を奪取した。

二十四日、敵は退却していったので追撃を開始、許巷上の敵陣、ついで午後二時半ごろには後村付近の敵陣をけ散らし、同六時には無錫東方約五_キにあたる菜查里西方の無名部落に迫って露営した。

翌二十五日、連隊の前衛でさらに無錫めざし、追撃を続けた。あと一息だ。だが当面の敵は武庄河揚巷上付近のクリークに拠ってがん強に抵抗した。直ちに連隊の左一線となり、この敵を猛攻、午後五時敵前渡河によつて武庄河を奪取した。同夜敵は前後七回にわたつて逆襲してきたが撃退して同部落を確保した。二十六日、夜明けとともに敵はまったく退却していた。

連隊は午前五時半、武庄河を出発、途中敵の敗残兵を掃討しながら五日ぶりに本道へ出た。しかしすでに組織ある敵の抵抗はなく、午後五時には無錫に入城した。



前進 前進 また前進！
クリークを越え無錫に向うわが郷土部隊

一方二十二日、第一大隊が唐西を攻撃しているころ、第二、第三大隊は本道左側にそびえる膠山（びょうざん）の敵攻撃に向かったが、すでに敵はいなかった。このため、第二大隊は無錫方面に向け山麓を前進し続けたが、午後一時連隊命令で板橋村方面の敵を追撃（二個中隊欠）さらに謝家村付近の敵を攻撃、同夜は下大河に集結し露營した。第三大隊も膠山に向け戦場付近に進出したが敵はなく、山ろくに沿って本道に出て、連隊主力とともに鴨城橋部落で露營した。

（三） 敗残兵を完全掃討

——連隊は47人死に123人負傷——

無錫東方の戦闘

下大河付近で夜露した第二大隊は、二十三日同地方面に進出してきた連隊主力と合流、その統一指揮下に入り、左一線となつて、闕家橋の敵を攻撃奪取して露營。二十四日、当面の敵は退却したので、追撃隊本隊内にあつて長大夏鎮、許巷上を経て無錫向け急進した。途中後村付近の縦深陣地の敵を、前衛の第一大隊が攻撃中だったため第二大隊は連隊予備となり、前村で露營した。二十五日午前六時に前村を出発、武庄河北方クリークの線を進出、同地の敵陣は強固なうえ、クリークと湿地で手こずるうちに日没となつてしまった。だが翌朝敵は退却、連隊命令によつて敗残兵を掃討しながら前進、無錫城内に入った。

第三大隊は、二十三日は連隊予備で汪沿棋、闕家橋にあつたが二十四日、追撃隊本隊の中にあつて長大夏鎮—許巷上道を前進、午後二時ごろには連隊の左第一線となつて許巷上に進出、露營した。二十五日は

連隊予備、二十六日は連隊命令によつて敗残兵を掃討しながら無錫に入ったのだった。

これが無錫東方地区の戦闘のあらまじだが、同戦闘では連隊砲中隊は砲一門で、困難な地形を乗り越えて歩兵に追及、闕家橋、許巷上、武庄河の戦闘を援護、以後主力は本道を前進した。また速射砲中隊も中隊長指揮の一門が活躍、主力は本道上を無錫向けに進んだ。この戦闘で連隊の損害は戦死四十七（I 33、II 13、III 不明、連隊砲1）負傷者百二十三（I 96、II 23、III 3、連隊砲1）を出した。

無錫城内には、すでに敵兵はもちろん住民も逃げていなかった。わが郷土部隊をはじめ野砲、戦車などの友軍部隊が続々入場した。連隊と同じころ、京滬線沿いに北上してきた部隊も無錫に入ったがそのまま同線沿いに常州めざして進撃して行った。三十三連隊は無錫で休養が与えられた。揚子江白茆口に敵前上陸以来十三日目である。振りかえるとこの間連隊は江南平野を九十余^キロも進撃してきたのである。華中の特色は華北と違って無数のクリークに悩まされたこと、中でも常熟東方地区では雨に始まり、雨に終った感じであった。



無錫、蘇州は舟でゆくと歌ったクリーク地帯の舟艇前進

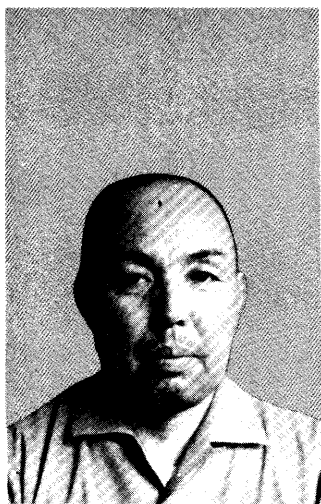
無錫は、激しい市街戦もなく陥落しただけに城内の民家や商店はほとんどそのまゝの姿で残っていた。重い軍装をといた将兵は物資徴発が許され、住民がいらないのを幸いに酒や食糧を思いきり徴発した。チャンチュウ（シナ酒）を飲んで夜は民家の絹ぶとんにくるまって寝た。当時軍の作戦は「物資は現地調達によるべし」というものであったし、あすをも知れぬ将兵にとって徴発はやむを得ないことであつた。こうして二十八日まで三日間駐屯した。



軍旗を奉じ無錫に入場するわが第33連隊長
野田大佐以下の精鋭

華北あるいは華中と縦横に猛進する三十三連隊の武名はいつか中支戦線で評判となっていた。部隊標識として軍服の左腕に赤丸のしるしをぬいつけているところから「うめぼし部隊」の異名をとり、その勇名は中国軍をふるいあがらせた。尋問した捕りよたちは「赤丸をつけた日本兵たちとは戦っても勝てない」と口をそろえたものだった。

また師団の砲兵も奈良の三八や京都の九連隊にはあまり力を入れないが、三



植田正三さん

無錫東方の戦闘

「無錫（むしゃく）東方の戦闘ほどよかった体験はない、夢中で念仏を唱えました」と回想するのが第七中隊第一小隊三分隊長（伍長）だった植田正三さん（七九）久居市庄田Ⅱである。

十一月二十三日払暁、無錫東方で第一大隊の左側に展開していた第二大隊は前兵となり、第七中隊を先兵に立てて

十三連隊にはすすんで援護してくれたものだ。砲兵というのは、援護射撃で射撃を伸ばした際、それにつれて第一線歩兵が前進してくれないと援護のしがない。そればかりか一線が弱いと射撃をしても気が気ではない。もし歩兵がくずれたら砲兵ほどあわれないからだ。「伊勢つ子正直」というやつで命令通り前進したものだ」とにが笑いしながら回想する人もあるがやはりドイツのメッケル参謀少佐が戦術研究の好適地と目をつけた久居、そこできたえ上げられた兵隊だけに強かったであろう。勇猛あまって一部の将兵が、南京ではかなりひどい行為をしたと伝えられているが、その真偽はいずれ明らかにされることだろう。

（三）

クリーク手前で敵襲

——応射の余裕なく被害大——

前進を開始した。植田伍長は斥候分隊長を命じられ、小銃一個分隊（十二人）軽機一個分隊（十二人）を率い、文字通り最前線を進んだ。

けさもうつとらしい空もようだ。

十一月下旬といえば大陸の夜明けの大気はハダを刺し、兵士たちの吐く息が白い。背をかがめるようにして低い姿勢をとりながらクリークを渡り、ぬかるんだ桑園の中を進む。四^キほど進んだところで幅七、八^ミ、深さ約一・八^ミのクリーク（みぞ）に出た。クリークの約十^ミ手前にさしかかったときだ。

ダッダッダ……

不意に向こう岸の竹ヤブからチェコ式機銃を浴びせられた。兵士たちはとっさにその場に伏せたが身をかくす援護物がない。そのあたりはもちろん、上海—南京間の桑畑はほとんど平地でうねがなかった。

敵の姿は見えない。トーチカを竹ヤブの中にたくみに擬装しているのだ。機銃弾だけが猛烈にとんでくる。たちまち中郷一等兵（四日市市出身）が戦死、ものの十分もたたぬまに分隊十二人の兵力は植田分隊長以下二人に、また軽機分隊も一発の応射する余裕もなくなちまちま半分の六人が倒れた。本隊はわずか二百^ミ後方まで進出しているはずだが、連絡をとることが出来ない。植田伍長以下わずか二十余人の斥候分隊は全くの孤立の形で敵機銃の前にさらされてしまった。

すぐ近くに民家が三軒あるが、目の前に見ながら逃げ込むスキがない。植田分隊長はその場に穴を掘って身をかくすよう命令した。兵士たちはエンピを取りだし、伏せたままの姿勢で穴を掘りだした。その間にも敵機銃弾は雨あられのようにわが兵の前後左右に飛んでくる。全滅は時間の問題か。

楠上等兵（南牟婁郡出身）が足首を三分の二も吹っ飛ばされ、止血が困難。上野正上等兵（南牟婁郡赤羽出身）が左腕貫通（のち上海で戦死）朝熊上等兵（三雲村出身）が左腕貫通、中上多吉上等兵（伊勢市出身）が足、鈴木信三上等兵（四日市市出身）がかすり傷、
「おじいさん」のニッケネームの古参兵中山一等兵（鈴鹿市白子出身）らが相ついで倒れていく。

敵の一弾が植田分隊長の右の耳をかすめ、背負い袋を貫いた。（この時の敵弾の衝撃波で植田さんはその後右耳は難聴となった）また一弾は右肩の軍服を食いちぎった。植田分隊長は上野上等兵が傷つく前に掘ってくれた壕にもぐりこんだ。青白い死神が、（こんどはお前が死ぬ番だぞ、ヒヒヒッ）耳まで裂けた赤い口から不気味な笑い声をはきながらにじり寄ってくるような気がした。

「なんまいだぶつ」

思わず念仏が口に出た。まっ先に浮かんだのは母の顔だった。当時、現役を終えたばかりだった二十三



クリークの多い無錫で出撃前の一息を入れる
第33連隊の勇士たち

歳の植田伍長、もちろん思う妻子はない。母を、次に父親を思った。雑念はみじんも浮かばなかった。ただ「生きながらえたい」と両手を合わせた。

チューン！

敵弾は穴の中にも襲った。

植田さんはその後、紫金山などの激しい戦闘に参加、勇名をはせたが、念仏を唱えたのは後にも先にもこの時だけだった。まだ野戦の経験が浅かったのである。

支那事変はもちろん、日露、大東亜戦争を通じてわが軍は「攻撃」あるのみ、一方中国軍は常に「守衛」をとっていた。堅固なトーチカ、機関銃の水冷式、保弾帯の弾丸、どれも陣地向きだった。さいわい敵はトーチカにひそんで乱射しているだけだったからよかったものの、敵が積極的な攻撃方式をとっていたら、植田分隊はたちまち全滅していたことだろう。

(三) 援護到着し「ホッ」

——壕の中で飯ゴウ炊さん——

無錫東方の戦闘

敵機銃の弾雨に一時間も身をさらしていただろうか。その間にも、兵たちの掘る穴は深くなり、全身をかくせた。さらに穴から穴へ連絡路を掘り、わずかの兵であくまで応



石川文治さん

戦する体制を整えた。こうしているうちに山中軍曹（度会郡出身）指揮の第三機関銃一個小隊（機銃二）がや々と援護に到着した。大隊の第二機関銃がほかの任務についていたのか、第三機関銃が配属されたのだ。

ほっとひと息ついた植田分隊は壕の中でハンゴウの飯を食った。壕をひとつだけ深く掘り、底からわき出た水を飲んだ。

さて午前十時ごろになると中隊もすぐ後方まで進出、直ちに展開した。高橋中隊長（多気郡大台町三瀬谷出身、のち戦死）は左手の民家にとりつき、声をあげて指揮をとっている。中隊の右側では第八中隊が攻撃中だ。ところが、敵トーチカの位置がさっぱりわからない。あとでわかったのだが、敵のトーチカはベトン製（コンクリート）で銃眼がわからぬかぎり制圧できない。小銃や機銃では歯がたたぬはずだ。敵は竹ヤブの中にたくみに擬装して銃眼を見せない。

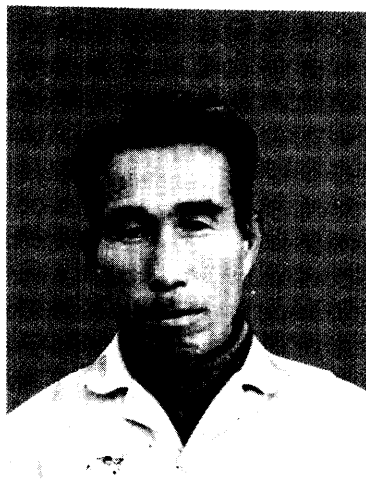
「ちくしょう」



犬と一緒に植田分隊

植田正三分隊長は島田輕機手（志摩郡出身）をつれて、クリークまではってたどりついた。じつと目をこらすと対岸のヤブの中に五、六挺の間隔を置いて二個のトーチカを発見した。その右側にも数個のトーチカがあった。竹ヤブのむこうはたんぼだった。やっと敵の銃眼を見つけたのはもう午後二時ごろだった。ダダダ……………

山中軍曹指揮の重機が、これまでのうつぶんを一気にはらすかのように、ものすごい射撃を敵銃眼に送り込む。ものの、二分であっけなく敵は沈黙した。いままでの苦闘はウソのよう、死命を制するとはまったくこのことだった。さらに到着した速射砲が、正確無比のリユウ散弾を銃眼にぶち込み敵をことごとく撃ちくだいた。この戦場で山中軍曹は殊勲甲をもらった。夕方兵士たちはクリークに仮橋を渡し、さらに前進に移った。



朝熊正二さん

ともかく「植田戦死」の誤報がとんだほどの死闘だった。前項に詳述の通り、第三分隊は十二人からたった三人に減ってしまったのだった。このため分隊は編成を直し、植田伍長（のち軍曹）は二分隊長となって南京攻略に向かった。植田さんは昭和九年十二月一日現役で三十二連隊に入隊、すぐ満州の本隊に派遣され、十一年九月チチハルで現役を終えた。十二年八月の召集で支那事変に参加、十三年五月睢県（すいけん）で手投げ弾で負傷、さらに翌十四年

六月沙窩（しゃか）で二度目の負傷をした。いずれも数カ月で回復、十四年夏連隊とともに凱旋した。十六年五月から旧七栗村助役に就任したので太平洋戦争は参加しなくてよかった。「近ごろ新興宗教がいろいろすすめるくるが、やはり日本人は仏教ですね。死に直面した時は「なみあむだぶつ……」が自然に口に出ましたよ」と話している。

◇ ◇ ◇

一志郡三雲村五主、朝熊正二さん（六七）も上等兵で植田分隊に属していた。「この戦闘でいろいろ苦労したが、ほとんど忘れてしまった」という。

◇ ◇ ◇

名張市中町、石川文治さん（五十六年一月死去）は連隊の緒戦、子牙河で奇襲され負傷したひとり。一等兵で一中隊三小隊の軽機射手だった。すっぱだかで鉄舟でねむっているととき一斉射撃を浴びた。まず右くちびるから左耳の下へ貫通、しばらくはじつとしていたが、

「ええい、こしやくな敵」

とばかり、力をふんばって軽機で掃射を返したがたちまち右手から左耳へかけて射ちぬかれ、ばったり倒れた。

（三）奮闘あえなく負傷

——上野市の
山田さん 犠牲者に今も読経——

無錫東方の戦闘

三六〇

無錫東方の戦闘で右足切断にいたる重傷を負った上野市猪田一四三七、山田昇さん(六九)の血の記録。山田さんは当時少尉で第一中隊の第一小隊長だった。

二十四日午後、山田小隊は先兵となって、主力の前方約千メートルを前進していた。幅約三十メートルのクリークに差しかかったとき、突然正面と対岸二カ所の三方からチェコ機銃を浴びせられた。

「伏せッ」

さいわいすぐ近くにあった土まんじゅうによつてひとまず敵弾を避ける。対岸二カ所の敵陣は、堤防が遮へい物になっていいるからこわくない。だが、こちらの堤防沿い、つまり味方の真正面から乱射してくる銃座はだまらせる必要がある。



山田 昇さん

「軽機前進ッ」

と命じる。

分隊長の渡辺文雄伍長、向井嘉一射手、笹浦弾薬手が待ってましたとばかりおどり出て、バリバリッと射撃を開始した。だが敵はあなどれなかった。あつという間に渡辺伍長がみけんを射ぬかれ即死、笹浦弾薬手も両肩をやられ倒れた。(くそッ)二十二歳という向こう見ずの山田少尉はかっと頭にくた。

（おのれ、かわいい部下を！）

ギリリと軍刀を抜き払い、

「突撃！」

と叫んで地をけた。とたんにダダダダ……。チェコ機銃がほえ、足元の土を弾雨にたたかれ、もんどり打って再び土まじゅうのかげにとびこんだ。軍刀も曲がってしまった。しばらくすると、てき弾筒分隊の北川精作筒手が、

「やられた」

と叫び、

「小隊長殿、さっき食った昼めしが全部出てしまいました。もういけません」と絶叫した。

「バカ、大丈夫だ、しつかりせい」と、どなったが、腹をやられ、腹わたのとびだした北川筒手の戦死は目に見えていた。（ひと晩苦しんで戦傷死）

この間にも敵は近くの橋を渡って突撃してきそうな動き、ぐずぐずしてはいられない。

決心した山田少尉は、自分で後方千郎の大隊主力に救護を求めに走った。背後から撃たれるこわさ、間もなく伊藤准尉指揮の重機関銃一個小隊がかけつけ、堤防にすえつけるとすぐに、

ダダダダ……

と快音を響かせた。さすがの敵もややなりをひそめた。（重機に負けておれぬわ）と小銃をワシづかみにして山田少尉は堤防にかけ上り、射撃を開始した。この時だった。右ヒザに丸太棒でぶん殴られたような

ショック。(やられたッ)と見れば鮮血が吹きだした。右ヒザ関節の骨を砕かれたのだ。

「小隊長がやられたッ」

と叫んでかけつける部下に引きずりおろされて止血手当てを受けた。やがて前進してきた中隊主力が突撃するのをぼんやりながめた。「その日は払暁からの戦闘、午前十時から午後四時まで六時間交戦した。ご子息はクリークをはさみ敵と五十メートルの近接距離でよく奮闘されたが午後二時ごろ右足に貫通銃創を負った。本人は本懐だろうが、彼の行く末を思うとふびんです」

これは田中中隊長から山田さんの父親に報告された手紙(いまも保存)の一節である。

十数日後、上海の兵たん病院まで後送されたが、すでに傷口からくさっており右足三分の一を切断、内地に帰って予備役となった。

山田さんは熱心な日蓮宗の信者で自宅にまつり、戦死した部下と戦争犠牲者、さらには華北、華中住民に読経を続けている。

「これが生き残ったもののつとめです。戦争ほど悲惨なものはありません」と、しみじみ語っている。

(元) 瞬間、生死意識せず

—— 稲森 さん 忘れえぬ「勇ましさ」——

鈴鹿市国府町西之野、農業、安藤之雄さん(六七)も無錫の戦いで背部左右貫通銃創を負った。第一中隊第三小隊の軽機分隊長(教導学校出、伍長勤務上等兵)だった。

二十四日の戦闘である。攻撃前進中の小隊は、幅約三十呎のクリークにぶつかった。もちろんクリークは満々と水をたたえている。あたりはクワ(桑)畑だった。幸い民家が一戸あり、小隊はひとまず民家によ(拠)った。からだをだすと対岸のチェコ式機銃がほえる。安藤分隊長はクワ畑の中、すぐ近くに大きなケヤキがあるのを見つけた。

「行くぞ」

部下を励まし丘にとりついた。そこからクリークはもちろん、対岸の敵陣が見渡せた。腹ばいになると、双眼鏡をとりだし、敵情を探る。チェコ式機銃の射撃音をたどると、クリークをへだてた約三、四百呎ぐ



稲森 明さん

らいの地点に白壁の民家があり、その土蔵の下の方からぱっぱつと白煙が出ている。(ふむ、土壁に銃眼をくり抜いてやがる)と見た安藤分隊長は、直ちに射撃を命じた。射手の田中彦一等兵(あるいは天花寺俊夫一等兵)が引き金をしぼった。

タタタタ……

軽い怪音を残して、タマは目標の白壁に吸い込まれて行く。双眼鏡で着弾点を確認していた安藤分隊長、

「いいぞ、そのまま続けろ」

と思わず声がはずむ。だが、当時分隊の重機は十四年式重機関銃で、この式は一連（三十発と記憶）撃ち尽くすと、新しい弾丸を横から差し込む仕掛けだ。その作業の間に、ほんのわずかの時間だが射撃が中断する。それがスキだった。しかも大きな木の根元に陣取っているから、かつこうの目標になった。チェコ式機銃弾が集中してきた。

「たッ」

背中にショックを受けた安藤分隊長、ひっくり返り気絶してしまった。ふーと感覚が薄れていくときの気持ち、えもいわれぬいい気持ちだった。三十分ほど失神していただろうか。かすかに気がつくと、さっきの民家に横たえられていた。そして夢うつつの中で、突撃ラッパと喚声を聞いた。やがて常熟まで下げられ、そこでこれも負傷した山田昇さん（上野市猪田）「前項」と会い、「お前もやられたか」と介抱し合ったものだった。

安藤さんは上陸早々の東辛荘の戦闘で左肩をやられ後退、回復後石家荘で本隊を追及、白茆口上陸後、支塘鎮を無事戦



重機の攻撃態勢

つたが、この無錫で再び負傷、内地に送還された。「よほど運が悪かったのでしょう。従つて支那事変では戦つたといえないほです」

内地に送られ、傷がなおると、十四年四月仙台の幼年学校に助教として出向を命じられた。十八年十二月一日、准尉に進級したので久居にもどり、動員下令されたばかりの第百五十一連隊に転属、シンガポールに上陸以後特務機関に変わり、モールメン、インパールに転々、現地で終戦、抑留されたのち復員した。



名張市下比奈知、稲森明さん(七二)にとつても無錫の戦闘が最も印象深い。第三中隊指揮班軍曹だったが派遣した将校斥候が二組とも帰つて来ないので、第二小隊を指揮して突撃した。「木舟を一隻探し、小隊長二十人が乗つて発煙筒、重機の援護のもとクリークを渡河、敵陣に突っ込んだ。本舟からざぶんと水際に飛び込んだ瞬間の生死を意識しない、勇ましい気分は忘れられません」日没後、追撃の途中転倒して打撲傷を負い入院、南京警備中復帰、帰徳で曹長に進級、二中隊長に変わった。昭和七年兵、十九年再び応召、百五十一連隊でインパール作戦に参加、同地で終戦。

(四) 亡父にすぎる地元娘

——中島曹長 思わず抱きしめ涙——

無錫東方の戦闘

武庄河の敵前渡河を援護した第三中隊軽機一等兵、佐々木博敏さん(六七)「北牟婁郡海山町相賀栄町」の

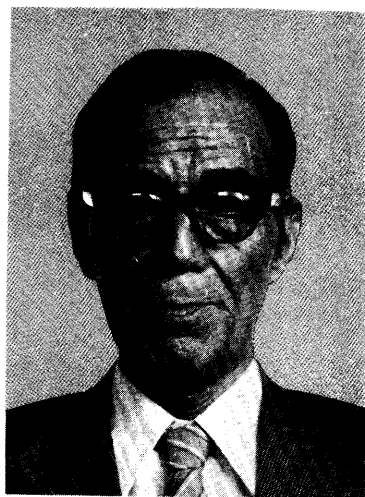
奮戦記。

無錫東方約四^{キロ}の無名部落で露營した第一大隊は翌二十五日も連隊の前衛で進撃を続けた。夜明け方から斥候に出ていた第三中隊の西山(方富)分隊長の報告によると、約二^{キロ}前方の武庄河付近でクリークを距てた敵陣があり、いま陣地構築中らしいという。第三中隊は直ちに前進に移ったが、午前十時ごろクリーク手前の桑畑に達すると、敵の激しい抵抗が始まった。中隊は広く散開し、各個に前進して堤防にたどりついた。クリークの川幅は約三十^{メートル}、橋はもちろん破壊されている。対岸の敵陣はやや高くなっており、そこから激しい火力を集中してくるので、高さ一^{メートル}足らずの堤防にとりついた中隊は身動きもできない。

軽機、小銃、てき弾筒の各分隊は重機の援護(敵は未集結か)で堤防にとりついた。射手の佐々木一等兵はさいわいそこに転がっていた黒塗りの寝棺のかげに軽機を据え、しゃにむに引金をしぼった。だが、チェコ式機銃あなどれず、たちまち佐々木一等兵の右にいた分隊長がのど管銃創を受け戦死、三浦清輔上等兵(一志郡嬉野町、軍曹)も胸部貫通の重傷を負った。敵は右側面、やや右へ曲がり込んだ対岸からも



破壊された橋。まだ火炎が上がっている



中島典雄さん

チエコ銃弾を浴びてきた。だが西山分隊が勇敢にも雑木の小高地にとりついたため、側面をおびやかしていたチエコ銃座は後退した。この行動途中に寺際松男上等兵（津市櫛形出身）が右足をやられ田の中に倒れた。昼過ぎになって大隊主力が前進してきた。第四中隊が左翼に展開、敵の右翼を包囲するような隊形をとった。だが対岸堤防沿いの敵第一線陣地は頑強だ。ついに決死隊による敵前渡河が企図された。

佐々木一等兵は「自分も決死隊に加えて下さい」と頼んだが「射手だからだめだ」と退けられた。午後四時過ぎ、かき集めた木で浮き橋をつくり、重火器援護のもと決死隊は渡河に成功した。佐々木一等兵も撃ちまくった。「あとで気がついたら寝棺に無数の弾痕がついていた。よくやられなかったものだ」佐々木さん兄弟三人は、同じ十六師団で戦っていた。長男の善一さん（海山町）は第十一中隊に、三男の歳一さん（金城県で戦死）は師団野戦病院に属した。博敏一等兵は独身だから思い残すことはなかったが、善一

さんにはすでに子供があつたため安否を気づかった。十四年八月凱戦後、各務原（犬山）の飛行第二戦隊にかわり、台湾、サイゴンから関東（カントン）を経て漢口（ハンカオ）で終戦、抑留され二十一年六月に復員した。

○ ○ ○

連隊本部付曹長だった津市丸之内本丸、中島典雄さん（六〇）
『有限会社中島化粧品代表取締役』の忘れ得ぬ印象を一つ。無錫東方の敵を破った翌朝、連隊本部はワラの中で夜

を明かした。あたりには逃げおくらせて死んだり傷ついたりした多数の住民が横たえられていた。その群の中に乳児と二人の幼児をかかえた母親の姿が目にとまった。そのうちに姉（五、六歳）の方が、死体の山の中から父親を見出した。父親（農夫）は日本軍の銃剣で胸板を刺され、死んでいた。かけ寄った女の子は「フーチン（お父さん）フーチン」と呼んで父親をゆり起こそうとするのだ。父親はのがれようとして、突きだされた銃剣を握ったらしく中指が真つ二つに割れている。女の子は血まみれのその手を握って泣きだした。中島曹長は思わずその子を抱き締めた。そこへ野田連隊長が顔をのぞかせた。事情を話すと連隊長も思わず涙を落とし「あたたかいものを食わせてやれ」と言いつけてきびすをかえして去った。中島さんは昭和九年兵、大東亜戦争は百五十一連隊でマレー、ビルマ方面で転戦した。

（四） 決死のクリーク越え

——小谷伍長 死を覚悟し突入——

無錫東方の戦闘

当時第三中隊第一小隊の軽機関銃分隊長（伍長）だった小谷弘さん「上野市福居町、五十七年死去」も、無錫東方の戦闘は印象深かったと生前よく話していた。

二十五日、連隊の前衛となつて無錫めざし進撃中の第一大隊はクリーク付近で敵の抵抗にあつた。わずか幅四、五十メートルのクリークだが、これを越えなければ無錫に入れない。敵としても、このクリークを渡られては、難攻不落を誇る無錫もあぶなくなる。対岸堤防沿いの敵第一線陣地は必死だ。戦況ははかどらぬ

まま、日没となった。

渡辺大隊長は幹部を集めて検討した結果、決死隊を編成、手持ち重火器の援護で敵前渡河して突破口を開くことに決まった。決死隊は第三中隊の第一小隊を主力に二、三小隊からも数人ずつ出して混成一個小隊（五、六十人）を編成、第一小隊長、浦口庄三少尉（志摩郡阿児町）に指揮を命じた。決死隊の任務はクリーク対岸の警戒陣地を破り、主力の渡河点を確保することであった。

出発に先立ち、中隊長は決死隊を集めて記念写真を取り、そして「お前たちはいさぎよく死んでくれ。護国のはな（華）として靖国神社にまつられるだろう。天皇陛下にも奏上されるだろう。遺族のことは心配するな」と訓示した。じつと聞いていた小谷伍長は、思わず涙を落とした。感激の涙である。

いよいよ自分の死ぬ番が回ってきた。いまさら思い残すことはない。同じ死ぬのなら、肩身の狭い最期だけは遂げたくない。そう決心して、ぐっと腰の短剣を握りしめた。



小谷 弘さん

時刻は午後四時ごろだろうか。初冬の日はずでに西に落ち、夕やみが立ちはじめていた。歩兵砲、機関銃が援護の火ぶたを切った。それを合図に決死隊は渡河を開始した。はじめ、丸太でイカダを作って渡る計画もされたが、新しい敵火線のエジキとなる恐れがあった。水は首までであった。兵士たちは両手で銃を頭上にささげ、クリークを渡る。敵

火線が活発になった。チェコ式機銃がほえたてる、手投げ弾もバラバラと飛んでくる。決死隊はクリークを渡り切るまでに、すでに相当の損害を出した。だが、しゃにむに堤防にかけ上がると、たちまち白兵戦で警戒陣地を突破、これを見た中隊主力も渡河を始めた。

敵第一線陣地は前方約百呎の地点にある。チェコ式機銃の掃射を浴びせてきた。折り重なって倒れる戦友。しかし浦口小隊長は軍刀を振りかざし「突っ込めえッ」と怒号した。

「わあッ！」

兵士たちは戦友を踏み越え突っ込む。軽機の射手は腰だめ射撃（平射）で敵陣をなぎながらおどろかす。すさまじい白兵戦となった。ついに六時ごろには武庄河を占領した。

バンザイを叫びながら、小谷伍長は（ああ、おれは戦死しなかった。きょうも生きのびた）とわれにかえったものだった。戦友が「浦山（守）上等兵がやられた。川瀬定男も戦死だ」と叫んでいるのを聞いた。

陣地を確保してもゆだんは出来なかった。午後十一時か十二時ごろ敵が逆襲してきた。チャルメラに似たラッパを吹き、喚声をあげて百四、五十呎まで近づき射撃してきた。勇敢な



無錫の表門に突入したわが軍

数人の敵兵は、わが陣地のすぐ近くまで忍び寄り手投げ弾を投げこんできた。わが方はこれをなぎ倒す。手投げ弾がサク裂した瞬間の明かりで見た敵は白ハチ巻を締めていた。決死隊だろうが、日本の夜襲とは比較にならぬ戦法だ。日本軍は無言で敵陣へ突っ込むが、敵の戦法は喚声をあげて接近、手投げ弾を投げつけるだけで引き返して行く。(こあいきようだぜ)兵士たちは敵をあざ笑ったものだが二時間ほどもすると再び夜襲してくる始末で、兵士たちはろくろく眠れなかった。

明けて二十六日、連隊は出発、追撃に移った。めざす無錫まであと四^キだった。

「決死隊が出発前に写してもらった記念写真は、ついに故郷には届いていません」と小谷さんは語っていた。その後漢口作戦、大別山の戦闘で手投げ弾を鉄カブトにまともに受けて負傷、功七級、十八年に召集され、久居で教育係、同地で終戦となった。

(四) 長男が身代わりに

——神札を失った日に病死——

無錫東方の戦闘

一、二年間も戦線にいた人ならたいてい「奇跡」(精神感應)を経験している。これもそのひとつ。第二大隊副官だった名張市東町出身、西山良之助さん(故人)が、生前に語っていた不思議な話を紹介しよう。第九中隊第二小隊長(少尉)で北支に上陸した西山さんは、南京戦で二大隊副官となった。十一月二十四日、無錫東方の戦闘中のこと、出ものハレものところをきらわずで、西山中尉は大便をもよおした。(困

ったぞ」と思ったが、このままでは下腹が気になってとても戦えない。(いつそズボンをはいたまま垂れ流してやるか)と思ったが、あまりいいかつこうじゃない。気にしだすといよいよどうにもならない。(ままよ)と桑畑にとび込むもどかしくズボンをおろした。

ピューン、ピシッ!

かがみ込んだあたりにおびただしい敵弾が飛んでくる。そのたびに首を縮め、シリを回して退避する。
ピシッ!

目の前の桑の幹を敵弾がかみ切った時など思わず(ナンマイダ)と胸のお守りをつかんだものだ。そのとき(おやつ!)と気がついた。「神札」がないのだ。西山中尉は出征するときから、神仏両方のお守りを故郷特産のキヌのひもでくくり、両肩から十字にハダにかけていたのだ。その上に下着、軍服を着け、足はゲートルを巻いている。だからもしヒモが切れても、腰のバンドが、ゲートルの結び目のところで止まっているはずだ。落とすはずがない。あたりを探しても見当たらない。

(はて?) 気になって部下にも探させたがついに見つからない。(ああ俺も神に見放されて仏になるらしいぞ) いままでカミサマなどまるで信じていなかった西山中尉もやはり人並みに不吉な予感に襲われた。だが負傷もせず戦闘は続いた。(連続の戦闘でおれは疲れているのかも知れない) そうも思った。

さて、話は先へ飛ぶが、南京の要塞、紫金山の激戦も無事に戦いぬき、南京に入城した。ひと息入れたある日、三浦俊雄大隊長(津市丸の内)から、

「副官、貴様水くさいぞ」

といわれた。

「えっ？」

「水くさいといっているのだ」

「なぜですか。自分は予備役ですから、行動がにぶいとか、戦闘の足手まといになるといわれるなら話はわかります。しかし水くさいといわれる覚えはありません」

副官というのは大隊長の助手みたいなもの、作戦をたてるのを助けたり、中隊の動きを掌握したりたまたに大隊長の好きな酒を徴発してきたり、十分に女房役は果たしているつもりだった。だから大隊長のいう「水くさい」の意味が分からなかった。

「副官、内地に残した長男（満一歳）が病死したのに、なぜおれだけ知らさなかったか。新聞には「息子の死を秘めて突撃する西山少尉」って、でか出ていているじゃないか。だから水くさいというのだ」

「な、なんですってッ」



無錫の休養
戦の跡の銃眼も子供には無関心

とびあがつて驚いたのは西山中尉だ。

「長男が死んだのですって」

知らなかった。つい二、三日前内地の妻から届いた手紙にも、息子の死などこれっぽちも書いてなかった。

「副官、貴様はほんとうに知らなかったのか」

「初耳です」

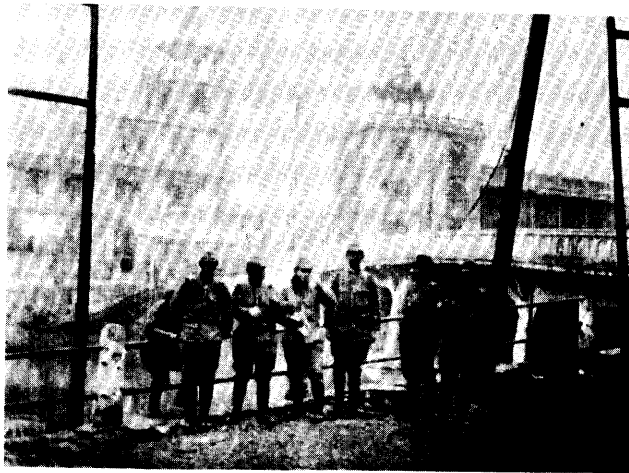
「そうか。貴様の奥さんは、貴様を心配させないため知らさなかつたのだな、いい奥さんだ」

「で、大隊長殿、息子はいつ死んだのですか」

「十一月二十四日と書いてあつたと覚えているよ」

「何ですって」

西山中尉はもう一度声をあげた。十一月二十四日といえば無錫の戦闘中、しかも神札を失った日ではなかつたか。ぽう然と立ちつくした。出征の際、ほおずりをして別れてきた長男のかわいい寝顔が目に浮かんだ。無邪気に笑った顔、ヒゲづらを不思議そうな表情でなで回しにきたモミジ葉のような手——かわいい長男の姿が、ありありと次から次へ映っては消



無錫で三日間の休養、南京戦前の静けさ

える（長男がおれの身代わりになってくれたのだ、きっと）偶然で片づけられることではなかった。

（かわいそうな息子。父ちゃんはきつと戦いぬき、生きて帰るぞ）

「副官」

はつとわれに返ると、三浦大隊長が、

「ご子息のめい福を祈るよ」

いつものやわらかな口調で、西山中尉の肩をぼんぼんとたたいて戸外へ出て行つた。窓外には隊列を組んだ友軍がクツ音も高く続々入城してくるところであつた。

「漢口作戦、大別山の戦いのときにも、途中道に迷い、まる二日間山中をさまよつたが、このときも亡母が夢に立ち、道を教えてくれた。心理学者はどう説明するか知りませんが、まったく不思議な体験でした」

と回想している。

西山さんはこのあと大東亜戦争では十八年末久居で編成された恵部隊の中隊長（大尉）で十九年二月蒙古へ、同地で終戦、抑留された。三十八年死去。

（四） 沿道に敵の死体散乱

——部落住民 激しい抗日感情——

南京攻略戦

十一月二十九日早朝、無錫に滞在していたわが連隊に進撃命令が下った。三日間の休養で疲れをいやした將兵は、再び最前線めざし行軍を開始した。



この間にも戦局はどんどん進んでいた。上海を奪つたいま、残るは敵の首都南京である。呉江、福山の呉福陣地の攻略に引き続き、長江南岸に進出した戦線は無錫―江陰の線を結ぶ堅陣に殺到して、一路南京をめざして進んでいた。常熟、無錫をおとし入れた十六師団は、蘇州（そしゅう）から西北上してきた友軍（伊佐、脇坂、下枝の各部隊）とくつわを並べ京滬（けいこ）鉄道に沿い進撃、二十九日には常州、十二月二日には丹陽を奪い、南京まで九十九きに迫った。また揚子江沿いの友軍は南京への水路の関門である江陰砲台をおとし、さらに鎮江砲台に迫る。

命令

一中支那方面軍司令官ハ海軍ト協
同シテ敵國首都南京ヲ攻略スヘシ
ニ細項ハ關チハ參謀總長ヲシテ指示
セシム

昭和十二年十一月

奉勅傳宣參謀總長載仁親王

中支那方面軍司令官 松井石根殿

南京攻略の大本營命令書

一方、杭州湾に上陸した部隊は太湖南岸の要衝、湖州を奪い（二十四日）ついで長興（二十六日）宜興（二十九日）広徳（三十日）を抜き、さらに十二月三日までに溧陽（りつよう）郎溪（ろうけい）をおとしいれ、南京の退路蕪湖（ぶこ）めざし進撃、南京大包围陣は完成しつつあった。

こうして中国軍の南京防衛線は鎮江―（湯水）―句容―溧

水—高淳—蕪湖を結ぶ最後の一線だけとなり、文字通り揚子江に背水の陣をした。つまり南京には蔣介石の親衛隊である第三十六、第八十七、第八十八の各師、教導総隊、ほかに第六十六軍（一五九、一六〇師）第二軍団（四一、四八師）が続々集結、わが第十六、第九師団の前には湯水鎮に第七十四軍（五一、五八師）淳化鎮には第八十二軍（一五五、一五六師）を配するなど計四個軍十一個師、総勢約十万の大軍で、日本軍の進撃を食い止めようとしていた。

記述は少し前後するが、大本営の企図は次のようであった。十二月一日中支那方面軍司令官に対し「海軍と共同し南京を攻略すべし」と命じた。方面軍は直ちに同日、次の命令を指揮下の部隊に下達したのであった。

①方面軍は直ちに南京を攻略せんとす②上海派遣軍は五日程の行動を起こし、磨盤山山系西側地区に進出すべし。一部をもって揚子江左岸地区より津浦鉄道をしや断すべし③第十軍は十二月三日ごろ行動を開始し溧水（りっすい）および蕪湖に進出すべし。

そこで上海派遣軍は、第十六第九師団をもって湯水鎮（とうすいちん）淳化鎮（じゅんかちん）の敵防御線を突破し、



南京付近における抗日スローガン

東方から南京を攻略、また南京南方からは第十軍第百十四師団が攻撃した。第十六師団の任務は、湯水鎮付近の敵防禦戦を突破し、蒼波門（そうはもん）下麒麟門（しもきりんもん）を占領したあと、堯化門（ぎょうかもん）および紫金山（しきんざん）を攻略すべしというものであった。

無錫を出た連隊は三十日は常州に露営、さらに十二月三日には丹陽を過ぎ、南京防衛最後の外郭陣、句容（くよう）に迫まった。沿道は、日本軍の砲爆撃によってこわれた車両や敵の死体が散乱、しょう煙のたちこめる家屋など、さんたんたる情景が続く。南京に近づくにつれ、抗日感情はいよいよ激しい。部落の土壁には、至るところ「百年抗日」とか「倭寇壊滅」などのスローガンがでかで書かれ、住民は女、子供でさえ道を聞いても教えてくれない。

十二月といえば華中も冬である。朝は霜が深く、道は凍てついていた。露営の夜など銃を握る手がそのまま、こおりそうだった。

（四） 敵陣攻撃の命令下る

——飛行場で援護物はなし——

句容付近の戦闘

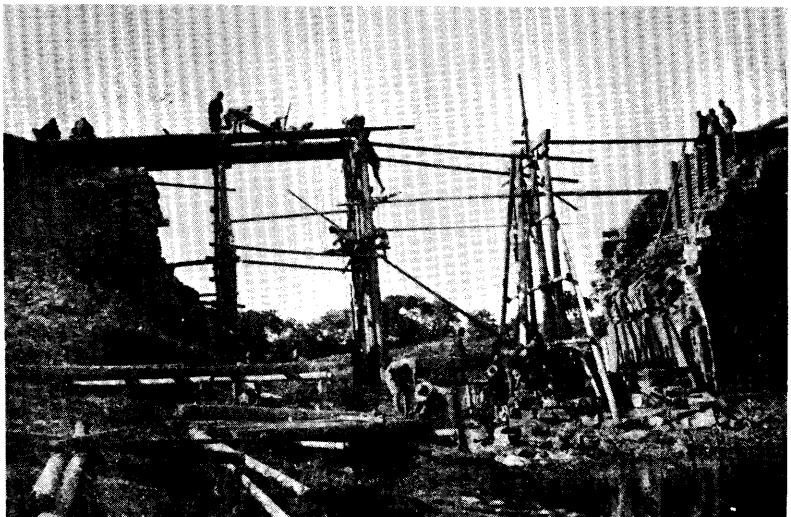
師団の前衛として前進していた第一大隊（渡辺綱彦少佐）は六日午前十一時句容に入城した。堅陣句容は前日（五日）片桐、大野両部隊によって占領されており、連隊付近の掃討をした。

句容から南京にいたる間の山岳地帯が、首都南京の最後の防禦線だ。掃討中の午後一時、西北方約二キ、

句容飛行場北の高地——吳家村呂城鎮付近に陣地を築いている敵の攻撃命令が下った。ただちに攻撃前進に移る。同二時半、飛行場南端に達した大隊は第二、第三中隊を第一線に、第一、第四中隊を第二線に配置して展開した。小高い台地に陣取った敵は、幅約三百メートルにわたって、数線の鉄条網をめぐらし、要所にえんがい銃座を構えている。敵陣までの距離約千五百メートルはたんたんとした飛行場。ところどころに雑草が生えている以外、援護物はまったくない。

飛行場の端に散開して前進を始めると、待ち構えていた敵がチェコ式機銃、小銃で射撃してきた。たいした火力ではない。一線に展開した中隊は演習さながら「歩兵操典」どおり進んでは伏せ、伏せては進む。飛行場の中ほどまでくると、赤い小旗が一線に並んでいる。（何だろう？）と、いぶかる者もあったが主力は気に止めずその地点まで進出した。とたん、

ダダダダダ……



爆破された丹陽から句容城への手前にある橋梁

急に激しい射撃が始まった。

ヒュルヒュル

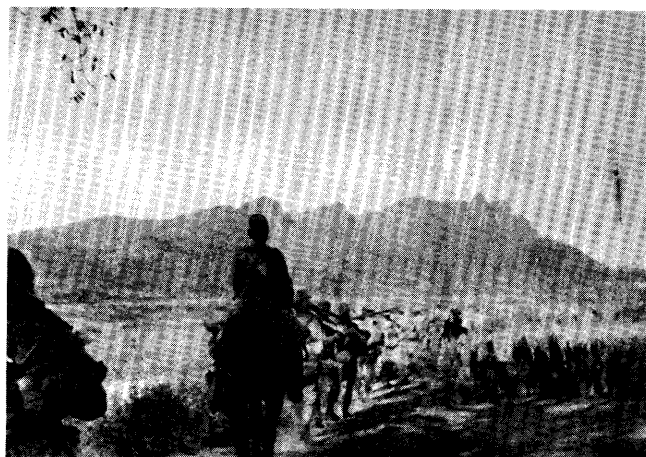
迫撃砲弾まで飛んでくる。敵は赤旗を標識に射程を合わせて待っていたのだ。だだっ広い飛行場には身をよせる場所もない。土煙の中で全員地面にへばりついたまま身動きも出来ない。

第一線の危機を見た後方の師団野砲が急拠援護射撃を開始、大隊の機関銃も撃ちまくった。さすがの敵陣もわが火力に圧倒され、しだいに射撃が衰えてきた。これを見た第一線は各個に躍進、敵陣約二、三百メートルまで接近した。早くも敵は退却を開始、大隊はいつきよに突っ込み、同三時半ごろには同陣地を奪取した。だが、敵は左方七、八百メートルの台地（夏村―栗子村）に第二線陣地を敷き、機関銃でがん強に抵抗してくる。

かろうじてその台地にとりついたが、前進できない。第二中隊長、日比野茂夫中尉はじめ数人が戦死、同中隊は第三小隊長伊藤源五郎少尉（津市半田）が中隊長代理で指揮をとった。戦況ははかどらぬまま日没となった。第一線中隊は壕を掘って戦闘を続行している。南京突入の先頭を争う師団司令部からは「早くやれ」とさいそくしてくる。予想外の抵抗に歯がみした渡辺大隊長、一気に敵を撃滅しようと得意の夜襲戦を企てた。だが、七日午前零時ごろ、敵陣に動揺の気配が見えたのですかさず突入して占領した。敵は湯水鎮めざしてころがるように逃げて行く。大隊は占領した呉家村でひとまず仮寝、午前八時から追撃に移った。

◇

◇



丹陽から句容に進撃するわが軍

第七中隊長だった川戸正巳さん（亀山市辺法寺町、農業）の思い出をひとつ。「夜の巡察中、池の水ぎわにピカピカ光るものがある。拾い上げてみると高さ二十センチほどの金仏だ。もったいないと思い、雑のうに入れて持っていた。次の戦闘（場所など不明）で、敵弾をくらったが、運よく金仏に命中してことなきを得た。ホトケが身代りになってくれたわけで、ていねいに葬ってやりましたよ」

（翌） 馬2頭が身代わり

飛行場の
どまん中 不意に敵から掃射

句容付近の戦闘

第一線に弾薬を補給する重要な任務を持つ小行李（しょうこうり）第一大隊小行李長の樋口平一さん（七〇）＝当時伍長、員弁郡大安町丹生川中＝の記録から。

十二月六日、晴れ、午前七時出発。連隊は師団本部となり、太平荘向け前進、第一大隊は途中から師団の前衛となり、句容に向かう。正午ごろ、小行李は句容で大休止、ともかく一刻でも休みたい。第一線の銃砲声を聞きながら待機する。午後一時、第一線歩兵に句容本道より右側の敵を攻撃せよ、と

の命令、小行李は飛行場格納庫付近に進出して後命を待った。

午後四時、大隊から「小行李はすみやかに追及せよ」との命令が下った。

「行こうぜ」

樋口伍長の号令で、弾薬を馬の背に積んだ小行李は前進を開始した。樋口伍長の考えでは、付近の敵は退却したから大隊長が前進命令を下したものだと思っていた。だから安心して馬列をつらねた。樋口伍長は乗馬の背にまたがり先頭を行く。ちょうど飛行場の中ほどに差しかった時だった。不意に残敵から機関銃が掃射された。

「散開っ」

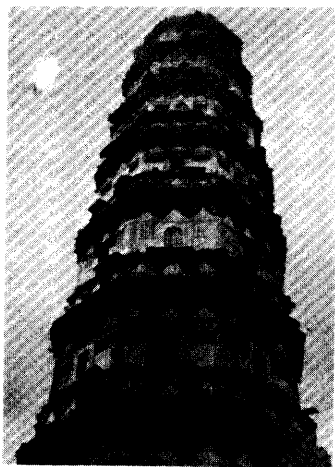
馬に乗っている樋口伍長と班長二人はあわてて馬を飛び降り、部下は敵陣を避けて散開する。

たちまち、小行李と行動をとんでいた渡辺大隊長の乗馬「健哈（けんば）」とダ馬「金愛」がひと声いなくて戦死した。健哈は青毛、鼻白のいい馬だった。

「目標、前方の高地まで各個躍進！」

樋口伍長は号令した。部下は暴れる馬をなだめて引つ張り、敵陣をぬって前方千メートル（？）の高地にたどりついた。

夜にはいっても前進できず、そのまま機関銃、大隊砲の馬部隊とともに露営した。さいわい小行李の損害は戦死馬二頭



忘れ得ぬ句容の廃塔

だけであつた。「だだっ広い飛行場のど真ん中で不意に集中射撃され、右に左に土煙が上がつたので、だれかがやられたかと思いましたが、幸いにして一人の負傷者もなく、馬が身代わりになつてくれたのだと思います」と回想している。

小行李が活躍した奥福集の戦闘のもようは徐州会戦の項で紹介しよう。ここでは樋口さんが作詞した小行李の歌の一節と出征者名を紹介する。

戦線果てなき大陸に

きらめき進む日ノ丸と

ともに露営の草枕

われら小行李、使命は重し

(以下略)

【第一大隊小行李】(住所は召集当時の旧市町村名)▽小行李長 樋口平一(員弁郡丹生川村中)▽班長、藤森明正(四日市市新浜町)同、崎実男(一志郡大三村三ヶ野)▽隊員 前野源一(河芸郡会宮村北長太)牛場久男(一志郡戸木村大塚)青木伝八(津市南浜町)吉田武義(津市相生町)多治見隆(津市三番町)今村源七(四日市市磯津町)藤岡貞保(阿山郡河合村波敷野)藤田松雄(津市上浜町)中村春治(員弁郡山郷村北中津原)小林勇(亀山市西町)河村末松(度会郡島津村方座浦)松宮重二郎(員弁郡丹生川村片樋)加藤正雄(四日市市新浜町)田上孝雄(久居市相川)草川長(鈴鹿郡昼生村中之庄)藤原貞治(一志郡大井村大仰)萩一男(三重郡県村下海老原)辻茂(河芸郡白子町)坂下留松(三重郡神前村高角)北出

篤介（飯南郡柿野村町横野） 太田平男（四日市市新川原町末永） 吉原三二（三重郡大矢知村） 中島万右エ門（三重郡楠村本郷） 辻吉一（三重郡千種村千種） 岡本敏夫（四日市市塩浜七津屋町） 岡角幸太郎（大津市石山鳥井川町） 後藤徳松（河芸郡上野村千里） 中村佐一郎（阿山郡新井村西村） 田中清次（大阪市港区安治川町） 野口平太郎（名賀郡箕曲村夏見） 棚瀬正二（四日市市末永町） 土村次郎（宇治山田市宮後町） 片岡留吉（一志郡竹原村） 矢田正一（三重郡小山田村山田） 奥山芳永（名賀郡菰野村山田） 渡辺馨（鈴鹿郡高津瀬村高宮） ▽欠員補充 ▯深田利郎（飯南郡港村大平尾） 上村繁（志摩郡長岡村相差） 上野貞義（南牟婁郡井田村神之内） 尾崎信雄（南牟婁郡鶴殿村） 諏訪実（桑名市西汰上） 中尾梅夫（津市愛宕町） 柿木義男（志摩郡片田村乙部） 浜口章（同上）

（哭）

夜襲かけ湯水鎮制す

——敵、鉄条網でがん強に抵抗——

湯水鎮付近の戦闘

句容飛行場北方の敵を破った第一大隊は、直ちに追撃に移り、七日午前八時呉家村を出発、同九時呂城頭を経て湯水鎮（とうすいちん）向け前進した。いぜん師団の前衛で午後一時には庄里を過ぎ、同二時五十分湯水鎮約二_〇手前の顔家村（がんかそん）に達した。次項でくわしく書くが、湯水鎮は南京東方わずか二十_〇、華中に知られた温泉郷である。前面の敵情を搜索の結果、第一、第四中隊を第一線に展開させた。敵の陣地はトーチカ、鉄条網、砲兵、迫撃砲などをもち、がん強に抵抗、戦況はかどらぬまま日没と

なつた。そこで渡辺大隊長は夜襲による奪取を企てた。

八日午前零時、第三中隊を左第一線、第四中隊を右第一線に展開させ、第一中隊を第二線に配置。(第二中隊予備)各中隊ごとに二班の鉄条網破壊班を編成、夜陰に乗じて行動を起こした。まず破壊班が突破口を開き、午前三時半ごろ一斉に突入、白兵戦のすえ、夜明け前には同高地一帯を占領した。

一方、第二攻撃隊の第一中隊は本道左側、湯水鎮の町の裏山高地を占領せよ、との大隊命令を受けた。つまり湯水鎮を見下ろす高地に日の丸をあげ、退路の本道をおびやかす作戦だ。田中中隊長指揮のもと、ひそかに敵の第一線をくぐりぬけ、任務を果たした。途中鉄条網にぶつかったが、田中中尉以下腹ばいとなって、地上から四、五十ヤの高さに張ってある有刺鉄線の間を抜けた。すぐ松林の小山だ。暗夜のこと、中隊は松林の中で方角を失い、うろうろした。このとき先頭の田中中尉が敵兵とぶつかった。とつさに抜き放っていた軍刀を振り降ろしたが、あまり近すぎて刀のツバの部分で相手の鉄カブトをたたいた。声をあげかけた敵兵を足ばらいで倒



温泉地を背に張りめぐらされた鉄条網陣地

し、口を押える。そばにいた部下がすかさず銃剣で刺し殺すという一幕もあった。

夜襲によつて湯水鎮を制した第一大隊は、ついで湯水鎮南方の湯山（標高三三二・五^ミ）を奪取せよとの師団命令を受け、すぐ攻撃にかかった。前夜予備隊だった第二中隊がこんどは第一線となり、山へかけ上がった。山上付近で二、三百の敵が抵抗したが、すでに浮き足だつており、午後五時半には湯水一帯を完全に占領した。同夜は一部で湯山を確保し、主力は本道沿いの分水嶺という小部落で露営した。

翌九日、大隊は師団の左第一線となり、本道南側の山岳地帯を攻撃しながら下麒麟門（しもきりんもん）に進出するよう命令を受けた。午前七時半出発、三十三連隊が本道左を、奈良三十八連隊が右第一線で攻撃前進、トーチカや地雷で固められた本道上は戦車がキャタピラを響かせて前進する。すでに敵影のない中国陸軍歩兵学校を経て青竜山鞍部に進出、先兵の第一中隊が中腹付近で二、三十人の敵兵を捕え、たちまち撃退（午前十一時）さらに友軍砲兵、戦車の協力のもと標高百^ミ余の桃子山の敵に対した。第一、第二中隊を第一線に配し、午後二時前後、確保した青竜山から大隊砲、重機の超過射撃の援護で一線は突入、同二時半には占領した。この戦闘で第二中隊の沢田宗七一等兵（安芸郡出身）や上岡八郎軍曹（尾鷲市出身）らが戦死した。ついで前方の無名高地に移ったが、無血で占領した。

確保した高地からながめると、本道上の戦車隊が道路両側の敵陣地をしらみつぶしにしながら急進して行く。日章旗をひるがえして敵を圧倒しているのは姉妹連隊だ。一方的な戦況だった。鎮江県城はきのう八日におち、蕪湖もきよう陥落、日本軍の南京大包围網は完成した。午後五時半、第一大隊は下麒麟門南端に達し、同夜それまで師団予備隊として後方を前進していた連隊主力（第二、第三大隊）も到着、連隊

の全勢力が集結した。そこで連日奮戦してきた第一大隊が代って師団予備となり、しばしの休養が与えられた。

(弔) 38人の「岡本一家」

——夜襲の前—— 一本のたばこ回しのみ——

湯水鎮の夜襲

日本軍得意の夜襲戦法——敵もふるえあがるが、突撃隊も死を決心しなければならない。だが、兵士たちはめめしい言葉はひとつもらさない。かえって朗らかにふるまう。互いの信頼は肉親以上だ。上官、兵の間柄はまったく「〇〇一家」といった具合に結束する。当時第四中隊(少尉)だった岡本祐憲さん¹は、



岡本祐憲さん

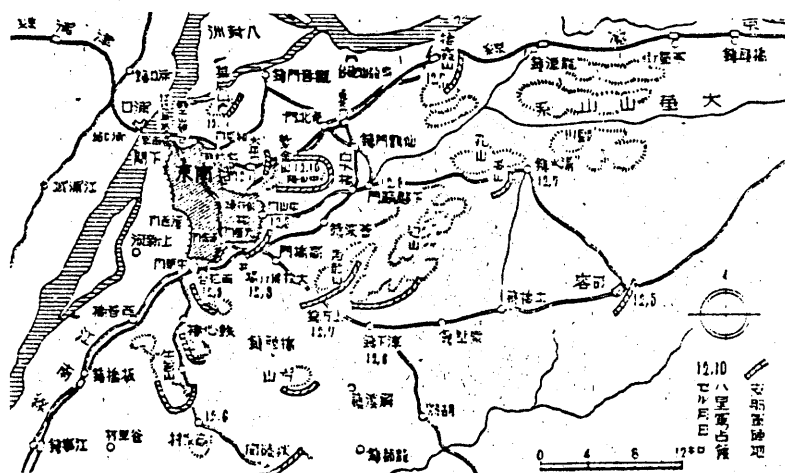
気郡勢和村丹生、元丹生大師神宮寺住職、四十五年没²は、湯水鎮の夜襲は印象深いものであったと、生前次のように話していた。

句容飛行場北方の敵陣を撃破した第一大隊は、息つく間もなく、その朝八時ごろ(十二月七日)追撃に移った。将兵もつらいが、敵に立ち直る機会是与えられない。将兵は本道を南京めざして進む。大隊はいぜん師団主力の前衛となっていた。途中中国軍砲兵学校があった。午後三時ごろ

には湯水鎮手前約二十キロの顔家村（がんかそん）に迫った。

湯水鎮は南京東方約二十キロに位置した有名な華中の温泉郷。きれいな屋根の並ぶ別荘地でもある。このあたりの地形は両側の山すそが本道をはさむように迫り、市街はその中心にあった。敵はこの地形の利を頼み、南京東方防衛のガン強な最後の抵抗陣地を築いていた。つまり本道上にかかる橋を爆破し、わが軍の前進を阻むとともに同地点を攻撃目標に、左の高い山頂に迫撃砲陣地を、湯水鎮の右の小山のすそに三十数個のトーチカ、えんがい銃座を構え、さらに川の上、下流（側防）から機銃陣地が本道を狙っている。うっかり部隊主力が前進すれば、文字通りスリバチの底で集中砲火を浴びることになる。この敵を撃ち破らない限り、師団主力は前進出来ないわけだ。敵陣をけ散らすのが、師団前衛である第一大隊の任務となった。

一大隊は直ちに攻撃に移り、道路右側に展開、後方にある味方砲兵の援護射撃のもとに敵陣地正面約千メートルの台地に取りついた。これが敵の虚をついたかっこうとなった。つまり敵

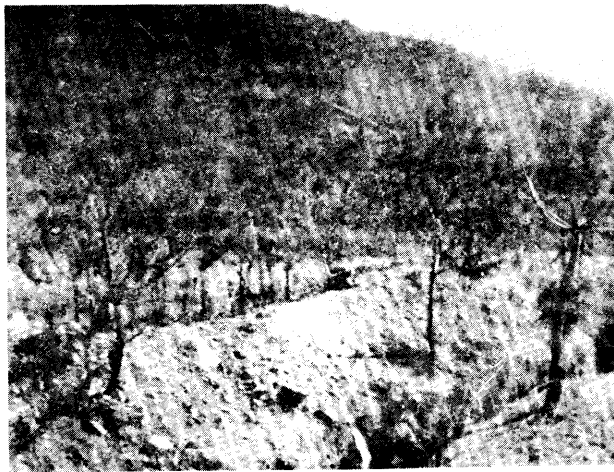


南京付近図

はあくまでも本道上を攻撃目標に置いていたからだ。敵野砲が湯水鎮のはるか後方になったのも幸いした。左側山頂の敵迫撃砲は盛んに火を吹いたが、わが台地までは届かなかった。だが台地はまったくのハゲ山だ。顔をあげようものなら、たちまち正面下の敵陣から狙撃を受ける。

両軍の布陣した高地（敵の山は小さな木が生えているが、わが台地より低かった。）の間は、いわゆる谷あいだで水田地帯が一望できる。あぶなくてとても斥候は出せないが、双眼鏡で調べると鉄条網を張りめぐらした後ろに強力な陣地を構えていることがわかった。またともに台地をかけおりて突撃することはとても出来ない。やむなく兵士たちは壕を掘って夜を待つことになった。敵機銃もなりをひそめた。

日が沈み始めた。一大隊長渡辺綱彦少佐（度会郡玉城町田丸出身、のちシンガポールで戦死）は「午前零時を期して夜襲を決行、前面の敵陣地を奪取する」と命令を下した。いよいよ夜襲である。兵士たちは夜襲準備にかかった。全員白い布切れを背中にぬいつけ、合いことばも決めた。月はなく、夜襲にはもってこいの夜だ。ただ夜に入ると大陸のきびしい冷気が軍服を通して身を刺した。兵士たちは、昼間ガン強な



湯水鎮前方の敵陣地の一部

敵陣をまのあたりに見ていた。今夜限りの命、みんな覚悟を決めた。

出発を待つ間、話は自然に故郷の空にとぶ。年老いた母のこと、妻や子の話、だがこれが最後の夜とも思えぬ朗らかさだった。どの兵も「御国に殉ずる」ことで満足しきっているのだ。いつもなら「岡本小隊長殿」と呼ぶのが「岡本小隊長」であり、「こら、お前」の間柄であった。たった一本のタバコを火がもれないように、地面に穴を掘り、上から天幕をかぶって小隊長三十八人が回しのみした。いっぽく吸っては、その吐く煙をもう一人が口うつしに吸い込む。ひとりが二ふくずつ吸った。これがいわば水さかずきだった。夜襲にはお互いに夫婦以上の絶対の信頼が必要だ。まさに「岡本一家」の図であった。

(四)

氷の田んぼを前進

——敵の鉄条網破り「突撃」——

湯水鎮の夜襲

八日午前零時、一大隊はひそかに行動を起こした。岡本祐憲少尉（二小隊長）の四中隊は右第一線、三中隊が左第一線に展開、一中隊が第二線攻撃隊、二中隊が予備となった。各中隊ごとに鉄条網破壊班が二班ずつ編成されている。渡辺大隊長は是が非でもこの夜襲で湯水鎮を奪取する覚悟であった。右翼には奈良の助川、京都の片桐、左翼には福知山の各部隊が展開、わが一大隊の湯水鎮突破を待っている。

「南京突入に遅れをとるな」という十六師団の衆望が渡辺大隊長の双肩にずっしりかかっているのだ。

まったくのヤミ夜だった。台地を降り、川を渡ると田んぼだ。田には薄氷が張っていた。（しまった）岡

本小隊長はシタ打ちした。田に残っていた水が寒さで凍りついたものだが、これはまったく計算外だった。四中隊の兵士たちは抜き足、差し足となったが、それでも、パリッ、パリン……

と割れる。と、案の定、音を目当てにダダッと機関銃を掃射してきた。

「野郎！ なかなか撃ちやがるぜ」

兵士たちは冷たさも忘れて水田に腹ばいとなり、パッパッと光る敵機銃の赤い舌をにらんだ。文字通りヤミ夜に鉄砲で、めったに当たりっこはない。かれこれ一時間もかかったろうか、やっとのことで田を越え、手さぐりで前進、第一線は敵前約五百メートルまで接近した。

夜襲隊はひとまずその位置に停止、二人ひと組の鉄条網破壊班四班がほふく前進で前方のヤミの中に消えて行く。昼間偵察ずみの鉄条網（支柱との間に数線の有刺鉄線を張りめぐらしている）をハサミ（鉄センキョウ）で切り、歩兵の突破口をつくるのだ。じりじりして待つこと一時間、破壊班がもどってきて、



湯水鎮の温泉
(昭和11年ごろ)

「破壊完了」

と報告した。各小隊単位で、それぞれの突破口めざしてほく前進を開始、鉄条網を渡り終わると直ちに突撃隊形に展開する。敵陣までわずか三十メートルの至近距離だ。出発前打ち合わせた「午前四時突入」の時刻が迫まると後方の味方の砲兵が援護射撃を開始した。あわてた敵も猛烈な掃射で応援、左右の側防機銃も乱射してくる。まっ先に鉄条網を突破している四中隊の岡本小隊はじっと待機していたが、味方の砲撃がやむのを突撃のチャンスと判断した岡本小隊長は、

「出発ッ」

と隣の兵の肩をつついた。後方に敢闘する分隊に次々伝わり、最後尾から、

「よし」

の手合図が返ってきた。うなずいた岡本小隊長はぎらりと軍刀を抜き放つ。兵士たちも銃剣を確かめた。弾倉には五発装てんしているが、安全装置はかけたまま、同士打ちを避ける夜襲の鉄則だ。

「突っ込め」

低い、押し殺した声で命令した。

「……ッ」

地をけた兵士たちは敵陣におどり込む。夜襲には絶対声を出すなと決められているが、敵陣におどり込むと同時に、

「わあーッ」

と自然にときの声があがる。敵のどぎもを抜くとともに自分自身を元気づける本能的な声だ。同時に敵銃座も狂ったように火を吐く。手投げ弾がサク裂する。その明かりであたりは真昼のようで突っ込むわが兵、手投げ弾を振りかざす敵督戦隊員の影が照らし出される。

軍刀を振りかざした岡本小隊長は敵えんが銃座に突っこんだ。と、銃座から伸び上がるようにして手投げ弾を構えた敵督戦隊員の姿が銃火の中に照らし出された。

「くそ！」

岡本小隊長が跳躍するより早く手投げ弾が敵の手をはなれた。その瞬間だ。

ダダダ……………

敵機銃が岡本小隊長めがけて激しくほえた。岡本小隊長は左わき腹に七発の機関銃弾を受けてのけぞった。と、そのあとへおどり込んできた部下の小倉利平等兵（度会郡大宮町七保出身）が、ちょうど破裂した手投げ弾の破片をともに浴びて即死した。手投げ弾がサク裂する前に機銃でのけぞった岡本小隊長の身代りとなったかっこうだった。小倉上等兵の血しぶきが、倒れた岡本小隊長の顔面を染めた。

（呪）

“くさりの敵” 必死で応戦

—— 一步も退けず全滅 ——

湯水鎮の夜襲

顔にべっとり鮮血を浴びた岡本祐憲小隊長は、はじめ自分がやられたのだと感じた。だが、手で血をぬ

ぐうと敵銃座が二、三軒前にはつきり映った。やらなかったと安心した瞬間には地をけつていた。左わき腹を貫いた七発の機関銃弾も、その一発が肉をえぐったただけであとは雑のうや水筒の革帯に命中していた。しゃにむに突つ込むと、えんがい銃座の裏に回りチェコ機関銃にしがみついている敵兵に軍刀を突き刺した。すかさずあとに続いた部下が、ほとんど同時に銃剣を突つ込んだ。このあと岡本少尉は異様な光景に目を奪われた。

敵はトーチカの外からカギをかけ、中の敵兵は鉄のくさりで足をしばられ、逃げられないようにしてあった。話に聞いていたが、この目で見たのははじめてだった。敵の死にも狂いの応戦もうなずけた。彼らは日本兵を撃退しない限り、死しかなかったのだ。

手投げ弾を投げて敗走して行つたのは督戦隊だった。トーチカの中の敵は、その場から一步も退くことが出来ず、わが軍の銃剣、手投げ弾で全滅したのだった。(なんとむごいことを!) 岡本小隊長はしばしシャバの「人間性」に



南京へ南京へ 一息つく将兵

もどる心を禁じ得なかった。

このころ左第一戦に展開した第三中隊も突撃を敢行していた。敵はやがて抵抗をあきらめて退却、夜明け前には同高地一帯を占領した。

なにしろヤミの中で生きるか死ぬかの夜襲だ。突撃中はだれが負傷したのか、小隊がどうなっているのかもわからなかった。夜が明けて調べると四中隊で小倉上等兵のほか塩崎文平伍長（北牟婁郡海山町出身）高橋輝夫上等兵（飯南郡飯高町）らが戦死していることが分かった。いずれにしても、初の大規模な攻撃だったが味方の損傷は少なかった。

岡本さんはこのあと金郷で一番乗りの手柄をたてているが、その話は別項に譲る。岡本さんは幹部候補生で昭和七年入隊（京都の九連隊）支那事変となって三十三連隊に属して中国を転戦、大別山の激闘の直前病気になり、内地に帰った。十八年八月召集、三十三連隊の輸送指揮官として中国へ。さらに二十年三月三たび召集を受け、東京警備中、大尉で終戦を迎えた。

岡本さんは、「当時はお国のため出征し任務を遂行したが、戦争のことはなるべく思い出したくありません」と生前くりかえし語っていた。

◇ ◇ ◇

同じころ、湯水鎮の裏山を占領（既述）した第一中隊に伍長として属していた津市野崎垣内、人見重保さん（七〇）は次のような思い出を語っている。

予定より早く占領したため、ちょうど敵と味方からはさみ撃ちのかっこうになり、砲撃で十数人がやら

れた。このとき弾こん利用で退避した。砲撃は一度落下した穴には、二度と落ちないものだとすることを体験した。日の丸を懸命に振ったら、南京道の友軍戦車が確認してくれたので助かった。

田中嘉衛中隊長がくやし涙を流し、戦死した部下にいちいちぬかずいて「許してくれ、おれが悪かった」と男泣きに泣いた。戦闘後私たち一個小隊で戦死した戦友をダビに付した。油をかけて頭部だけを焼き、その遺骨を持って本隊を追及した。

(吾) チヨッキが命の恩人

——西山 伍長 わき腹に破片食い込む——

湯水鎮の夜襲

湯水鎮の夜襲は井村屋製菓株式会社相談役、西山方富（まさとみ）さん（六六）『松阪市殿町一四四六』にとっても忘れられない戦闘の一つである。西山さんは、第三中隊第一小隊の第三分隊長（伍長）で、三中隊は四中隊の左の第一線で攻撃した。中隊長は長崎金之助中尉、小隊長は浦口庄三少尉（志摩郡大王町船越）と記憶する。

七日午後、湯水鎮の約二キロ手前顔家村に達した第一大隊は直ちに攻撃することになり、本道右側に展開、第三中隊は先兵で敵陣正面約千メートルの台地（はげ山）にとりついた。同時に、敵は迫撃砲弾の雨を降らせてきた。台地のかげから顔も出せない、敵情は既述のとおりだが、当面の敵を撃破しない限り、師団主力は前進できない。



西山方富さん

後方、師団野砲が援護射撃を開始した。南京一番乗りをめざす中島今朝吾師団長は、砲兵出身だけにじっとしておられず、「観測班前イへ」と、副官の制止を振り切って自ら野砲の陣頭指揮をとる。三十歳ほどの近くに散開する西山伍長らは思わずはらはら。案の定、迫撃砲弾の破片で師団長は軽傷を負ってしまった。師団長から五十歳ほどの近くには金丸吉生さん(百五銀行頭取、当時師団司令部経理部)も見守っていた。

さて夜襲は、第三中隊は左第一線となり、第三小隊が最左翼に、西山伍長の属する第一小隊はその右で突撃することになった。八日午前零時、ひそかに行動を開始した。ヤミ夜である。内地には、出征まぎわに結婚した妻を残していたが、死の覚悟はできていた。恐ろしくはなかった。どうせ死ぬまで帰れない前線の歩兵だ。それに苦しい戦闘の連続で一日も早くいい戦死場所を見つけて最期を遂げたいとさえ思っていた。

間もなく、一小隊はヤミの中の敵散兵壕へ突っ込んだ。このとき左の三小隊の突撃が早過ぎ、左のトーチカから猛反撃を受け、楠木繁男伍長(伊勢市大湊)が頭をやられ、また板倉ラッパ手(四日市市)らが戦死した。西山分隊は三小隊を援護するため左に向かい、りょう線上のくぼ地にとりつこうとしたがたちまち手投げ弾を浴びた。いったん停止を命じてから、再び右に向かい、さつき三小隊が奪取した敵陣を越

え、う回して敵の背後に迫った。

西山伍長を先頭に畑中茂上等兵（南牟婁郡御浜町阿田和）以下分隊員六、七人がほふく（匍匐）して続く。めざすトーチカまで五層に接近したが、トーチカはからっぽらしく、主力はふもとの散兵壕だ。

「行くぞッ」

西山伍長は部下をうながして銃剣をひらめかせ一気に突っ込んで行った。

「わあーッ」

部下も大喚声をあげて続く。（夜襲には無言の突撃が鉄則だがこのときは叫んだ）

正面三小隊と対していた敵は、不意に背後を突かれたのであわを食った。だが、死にもの狂いで手投げ弾を投げてきた。西山伍長は左わき腹に破片を受け、衝撃でどどと敵壕内にころげ込んだ。（やられたか、ダメだ！）と観念した。だがそつと手を動かしてみると力があるのだ。そう言えば息も苦しくない。（おれはまだ生きてるぞ）そう思った瞬間、西山



頑強に抵抗した敵陣のトーチカ

伍長はおどりあがつてしゃにむに敵壕内をあばれ回った。

西山伍長のシシふんじん（獅子奮迅）を見つけた軽機分隊長の藤井伍長（一志郡一志町波瀬、のち戦死）が部下二人を率いて救援にかけつけてきた。すでに夜が明け、敵は南京方面めざして一目散に退却を始めていた。ガケに登った西山伍長は小銃、藤井伍長は軽機で敵の背走を掃射した。

「西山分隊長戦死」という部下の報告で、ふもとに集結した中隊では遺体搜索をはじめていた。そこへひよっこり西山分隊長が元気に現われたので、みな驚くやら喜ぶやら……このときになって（おれはやられたはずだった！）と、われに返った。左わき腹に手をやるとたしかにマツチ小箱大の破片が食いついていた。真綿入りのチョッキを着ていたため心臓に達しなかったのだ。「戦争に行ってみると運、不運ということをしみじみ実感します」と、西山さんは当時の奇跡的な命拾いを思い出して語っている。

西山さんは内地で高島屋（大阪）に勤めており、兵庫県御影の市川誠次郎氏宅（元日本窒素社長）もお得意さまのひとりだった。命の恩人となったチョッキはその奥さんとお手伝いの平野さんらが作ってくれたものだった。西山さんはさっそく礼状を出し、ガイ戦するとまっ先お礼に訪問した。

西山さんは分隊長をつとめている間じゅう、部下を一人も戦死させなかった。「それが私のたつた一つの自慢です、自分の身を捨てて覚悟で敵情を十分に知った上で兵隊を動かした。ダンゴに固まって進まないことも功を奏した」と語っている。西山さんは昭和十五年に金鶏勲章、旭日章等を授与されている。

大別山で再度負傷、十八年ふたたび応召、護京部隊として志摩で終戦。昭和九年兵、戦友には松阪市五曲、農業、倉田福三さん（六〇）でき弾筒分隊Ⅱや、海山町相賀、佐々木博敏さん（既述）らがいる。

(三) 砲弾避け応急手当で

津
渡辺さんの
軍医少尉として活躍

湯水鎮の夜襲

砲弾がサク裂する最前線で負傷兵たちの手当てにかけずり回る軍医や衛生兵の苦労も並みだいていない。津市大門、渡辺内科医院、渡辺正さん(八〇)は日華事変では三十三連隊一大隊付軍医少尉であった。

十二月七日から八日朝にかけての湯水鎮の夜襲。一大隊主力(三、四中隊、予備は二中隊)が湯水鎮の右側高地を夜襲、奪取したころ第二攻撃隊の第一中隊(田中嘉衛中尉)は大隊命令で本道左側、湯水鎮の町の裏山にあたる小高地めざし、夜陰に乗じてひそかに進出、占領した。(別項)



渡辺 正さん

夜はすっかり明けた。眼下の道路を南京めざして敗走する千余の敵に軽機の迫い撃ちを浴びせていると敵ははるか向うの陣地から野砲、重砲、迫撃砲を「返杯」とばかり撃ち込んできた。

付近はもともと敵砲兵の射撃場だったらしく、狙いは正確。中隊は集中砲弾を浴び、たちまち谷田正雄伍長(度会郡出身)らが戦死、十数人が負傷した。

すでに占領した右側高地の大隊本部で待機していた渡辺